

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二二年

第九十六号

伊能忠敬研究会

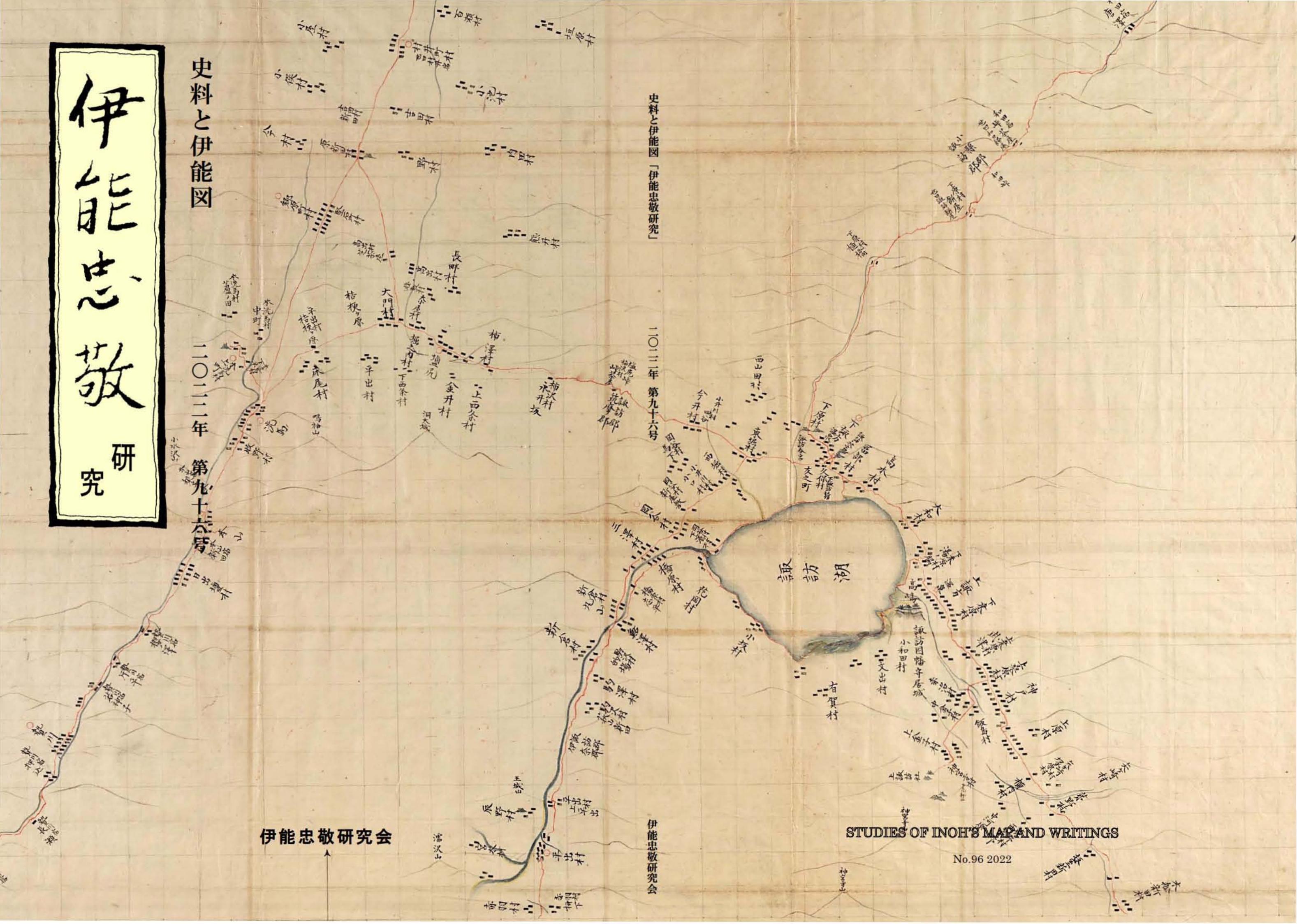
史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二二年 第九十六号

伊能忠敬研究会

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.96 2022



伊能忠敬一行の淡路島測量

—仮屋浦・志筑浜村—

廣田 晋也

●はじめに

伊能忠敬の第六次測量隊による四国測量は、徳島藩領の淡路島最北端の岩屋浦から始まつた^①。文化五年（一八〇八）三月五日に岩屋浦から仮屋浦まで、三月六日には仮屋浦から志筑浜村まで測量した。その後淡路島の東海岸と南海岸、沼島を測量し、三月十六日に淡路島の福良浦から四国の測量に向かつた。四国測量を終えた後、同年十一月十一日に福良浦に戻り、淡路島の西海岸と中街道を測量、十一月十七日に岩屋浦に到着し、淡路島の測量を完了した^②。

仮屋浦から志筑浜村までは当時主に漁業で大変栄えていた地域で（表1）、特に志筑は漁師や商人の家が建ち並んで大坂との船の往来が多かつた^③。この区間にある釜口村では妙勝寺の「妙勝寺納豆」、志筑ではカマスの腸の塩辛「志筑」といった淡路島の名産品が作られていた^④。

本稿では伊能大図（図1B、図2B）、伊能忠敬測量日記、伊能測量隊員旅中日記、輿地実測録卷五の原文を記載し、それらと淡路島の史料をもとに、（1）伊能忠敬測量隊の仮屋浦・志筑浜村の足跡、（2）江戸時代の佐野村と中食場所、（3）江戸時代の志筑浜村・志筑浦と宿泊場所、（4）淡路島の測量で随行した医師・喜田清庵について述べた。

●淡路島測量（仮屋浦・志筑浜村）に関係した人物

第六次測量隊の構成員及び徳島藩から淡路島の

測量に貢献した人物を表2にまとめた。伊能忠敬測量日記によると、三月六日の中食場所は佐野組組頭庄屋・蔭山和右衛門の家、宿泊の本陣を志筑組組頭屋・忍頂寺仁三郎の家、脇宿は造酒家であった島屋の菅平兵衛の家であった。組頭庄屋とは大庄屋とも呼ばれ、組下の各村浦の庄屋とともに村浦を治め、他村の普請の監督、村騒ぎの説得、もめ事の調停などを行つていた^⑤。

●伊能忠敬測量日記（以降、測量日記）^⑥

忠敬一行は文化五年（一八〇八）三月六日に仮屋浦から志筑浜村まで測量した。測量日記の原文は旧暦と不定時法で日時が記されているため、本節と次節では原文の後の括弧内に文献^⑦の広島の太陽暦四月一日に合わせて時刻を記載した。

（朝六時は午前五時半前である。）

○仮屋浦止宿打止^⑧同六日打止宿志筑浦迄三里
三丁〇四間也
○津名郡松尾岬燈明堂ヨリ志筑浦六日止宿前迄
メ六里一十二町四間

江戸六、七千石ニも所領
四人官（菅力）平兵衛宅
伊能仁（忍力）頂寺仁三郎
中食ハ佐野村庄屋影山和右衛門宅
泊リ津名郡志筑村造り酒や千三百も造る由也
此内家作り大造成事造り酒や也

同六日晴天無風

●輿地実測録 卷五

輿地実測録とは、文政四年（一八二一）に「大日本沿海輿地全図」大図・中図・小図が幕府に提出された際に、その付録として提出された伊能図のデータ集である^⑨。

假屋浦、三十四度三十一分半
三里三町四間

志筑浦 至志筑浜村宿所、三町九間、北極高、三十四度二十六分半、從宿所、歷川井村、至郡家浦、徑測、二里二町一十五間

次節以降では、測量日記と旅中日記で表記が異なる箇所は測量日記、これらの史料の人名や地名が淡路島の郷土史料と異なる場合は淡路島の郷土史料の表記に統一し記載した。

●伊能測量隊員旅中日記（以降、旅中日記）^⑩

第六次測量は測量日記のほかに、旅中日記がある。作者は第六次測量のみ参加した柴山伝左衛門

表1 天保五年（1834）仮屋浦から志筑浜村・志筑浦までの村浦の家数・人数等の一覧表^③

村浦名	石高	家数	人数	男	女	庄屋	船数
仮屋浦	6石9斗9升1合	441	2247	1174	1073	正井 源之助 植野 百太郎	7 ^a
谷村	178石7斗6升9合	57	237	127	110	山本 五郎左衛門	-
下田浦*	29石9斗8升9合	130	732	360	372	山添 喜右衛門	2 ^b
釜口村	1580石5斗5升5合5勺	234	1339	739	600	菅 惣兵衛	-
釜口浦	田畠高無し	30	129	72	57	能綱 源三郎	9 ^c
佐野村	1220石5斗7升8合6勺	339	2046	1088	958	蔭山 五左衛門	-
佐野浦	田畠高無し	140	804	430	374	四郎次郎	7 ^d
中之内村	1981石3斗7升1合4勺	300	1326	700	626	森 宇右衛門	-
生穂浦*	田高無し	84	353	201	152	実蔵	6 ^e
大谷村	879石8斗6升6合7勺	137	799	469	330	柏木 文右衛門	-
志筑浜村	2383石6斗4升9合	335	1444	783	661	忍頂寺 卯(二)三郎	-
志筑浦	田高無し	238	1037	509	528	島田 源兵衛 角村 久左衛門	39 ^f

*測量日記では下田村と生穂村と記載されているが、淡路島の郷土史料では下田浦と生穂浦と記載されている。測量日記の原文はそのまま記載したが、それ以降の箇所では淡路島の郷土史料の表記で記載している。

^a 6反帆 30石積から 8反 70石積までの船、^b 6反帆 30石積と 15反帆 140石積の船、^c 4反帆 30石積から 12反 130石積までの船、^d 4枚帆 40石積から 8反 80石積までの船、^e 4枚帆 30石積から 8反帆 70石積までの船、^f 2枚帆 15石積から 24反帆 800石積までの船

表2 伊能忠敬の第6次測量隊の構成員と徳島藩の測量に貢献した人物^{⑥-⑧}

第6次測量隊		徳島藩	
隊長	伊能忠敬	徳島藩主	蜂須賀治昭
隊長・従者	藤吉	徳島藩筆頭家老 洲本城代	稻田敏植
天文方下役	坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、 下河辺政五郎、青木勝次郎	徳島藩天文方*	閑権次郎、樋富菊郎
		人馬割元役**	廣田直道***
天文方下役・従者	文吉、兵助、惣助、文蔵	佐野村・中食	佐野組組頭庄屋・蔭山和右衛門
内弟子	伊能秀蔵、植田文助、久保木 佐右衛門	志筑浜村・本陣	志筑組組頭庄屋・忍頂寺仁三郎
供侍	神保庄作	志筑浦・脇宿	造酒家・島屋の菅平兵衛
棹取	佐助、善八	引縄手伝足輕	伊吉、武助、久郎、幾之助、俊蔵、新蔵、 牛之介、寅之介、富之丞、吉之助、甚蔵

* 徳島藩の天文と気象観測を務める係^⑨、** 忠敬一行の宿や中食場所の手配、人夫や馬の調達、その他雑務を行う係、

*** 淡路島北部にある柳澤村庄屋兼柳澤組十一ヶ村組頭庄屋

(1) 伊能忠敬測量隊の仮屋浦・志筑浜村の足跡

三月六日（四月一日）は朝から晴天で風が無かつた。六ヶ半頃（午前六時半頃）に仮屋浦を出立し、谷村、下田浦、釜口村、釜口浦、佐野村の順に海岸に沿つて測量した。昼食を佐野組組頭庄屋の蔭山和右衛門の家（影山は誤り）でとった後、佐野浦、中之内村、生穂浦、大谷村、志筑浜村と南下し、この日の測量を終えた。宿は、志筑浜村の志筑組組頭庄屋の忍頂寺仁三郎の家（本陣）と、造酒家の島屋の昔平兵衛の家（管や官は誤り）（脇宿）で、八ヶ前（午後二時半前）に到着した。忍頂寺仁三郎の家は藩主用の領主座敷がある大きな屋敷で、島屋も大きい造酒家であった。この日に淡路島測量中の付き添い医師・三原郡市村の喜田（木田は誤り）晴庵と対面し、病気であった下河辺は治療を受けていた。仮屋浦から志筑浜村までの間で方位を測った場所は四か所で、柏原山、千光寺山、洲本城山、友ヶ島などを目標に測量している（表3）。測量日記や旅中日記に記載がなかつたが、輿地実測録卷五によると志筑浜村の忍頂寺仁三郎の家から三町九間（約三四四メートル）の志筑浦で天体観測を行つており、現在の緯度とほぼ同じ三十四度二十六分半と出している。

(2) 江戸時代の佐野村と中食場所

天保五年（一八三四）時点の佐野村（現・淡路市佐野）の人口は二〇四六人であった（表1）。佐野村には水量が豊かな佐野川が流れ、その沿岸にいくつも水車小屋があつたようだ。文久三年（一八六三）七月に大洪水のため佐野川沿岸の水車小屋七戸が流失したことが記録されている（¹⁹）。水車は米を搗くために使用されていたと思われる。江

戸時代の佐野村の土産物は、佐野牛蒡として知られたゴボウ、薯蕷と言われた山芋、大粒であつた麦、山椒などであつた（²⁰）。

忠敬一行は佐野組組頭庄屋の蔭山和右衛門の家で中食をとつてている。蔭山氏の屋敷の場所は佐野城があつた城山の東にあり、淡路名所図絵の挿絵（図1D）や天保十一年（一八四〇）時点の分間絵図²¹と見比べると、佐野小学校跡地の少し西側にあつた。蔭山家の屋敷の北にあつた淨満寺は後に八幡寺と合併し、現在は同じ場所で八淨寺となつてている。

蔭山氏の先祖は、淡路島の史料の味地草によると、三木城主の別所長治の家臣の蔭山左近で、西阿弥陀宿村（現・兵庫県高砂市）に住んでいたが、天正六年（一五七八）羽柴秀吉が三木城主の別所長治を攻めた際に、支城の神吉城や志方城などがほぼ同時期に落とされ、左近や一族が多く討死した（²²）。その後三木城も落ち、天正年間に左近の子の市郎左衛門頼重は佐野の奥土居に住むことになった。延宝二年（一六七四）に頼重の孫の加右衛門の時に庄屋を拝命された時に住居を移し、そのまま代々住み続けた。現在は蔭山家の屋敷は無く、忠敬一行が宿泊したことわかる。

忍頂寺氏の先祖は、味地草によると、忍頂寺村（現・大阪府茨木市）にいた藤原氏二条家の親族といわれ、淡路島の尾崎村の長泉寺に移つた後、明応二年（一四九三）に淡路島の竹谷村に仮住まいし、細川氏が近畿・四国を中心とする守護の時は所縁があつて淡路島の養宜館にいた（²³）。その後細川氏が衰退した後は竹谷村に戻り、天正十三年（一五八五）には洲本城主の脇坂安治に仕え、税務を担当していた（²⁴）。その後、慶長十五年（一六一〇）に庄屋を拝命、宝永四年（一七〇七）には志筑組の組頭庄屋となり苗字帶刀を許され、寛政三

中に「志筑の浜は、名所でござる、後は川よ、前は海」²⁵と謳われるほど美しい風景があつた。志筑の名産品はカマスの腸の塩辛「志筑」で、三ヶ四寸の小さく、淡黒い色で脂が少ないカマスの腸を使つた乾燥塩辛であつた（²⁶）。他には酒、醤油、瓦などが作られていた（²⁷）。

忠敬一行の志筑浜村での宿は忍頂寺仁三郎の屋敷（本陣）と島屋屋敷（脇陣）である。忍頂寺家の屋敷は三月六日に本陣の宿、島屋屋敷は三月六日と十一月十四日に脇陣の宿として使われた。地元の人の話では、忍頂寺家の屋敷は志筑中央東の交差点から道を三五〇メートル程進んだ場所にあつた。測量日記に忍頂寺家の屋敷に領主座敷があつたと記載されているように、忍頂寺屋敷絵図（図3）で領主用の「御成間」が確認できる。島屋屋敷は志筑郵便局の裏の場所にあつた（²⁸）。志筑組組頭庄屋の忍頂寺仁三郎の記録の中にも「文化五年公義天文方御役人伊能勘解由様御宿被仰付相勤候、然處右御宿相勤候節諸縁為冥加自分ニ仕段奇特ニ被思召候旨御郡代様より被仰渡候」とあり（²⁹）。忠敬一行が宿泊したことわかる。

(3) 江戸時代の志筑浜村・志筑浦と宿泊場所

天保五年（一八三四）の時点では志筑浜村の人口は一四四四人、志筑浦の人口は一〇三七人であつた（ともに現・淡路市志筑）（表1）。志筑は漁師や魚の販売で生計を立てる家が多く、淡路農歌の

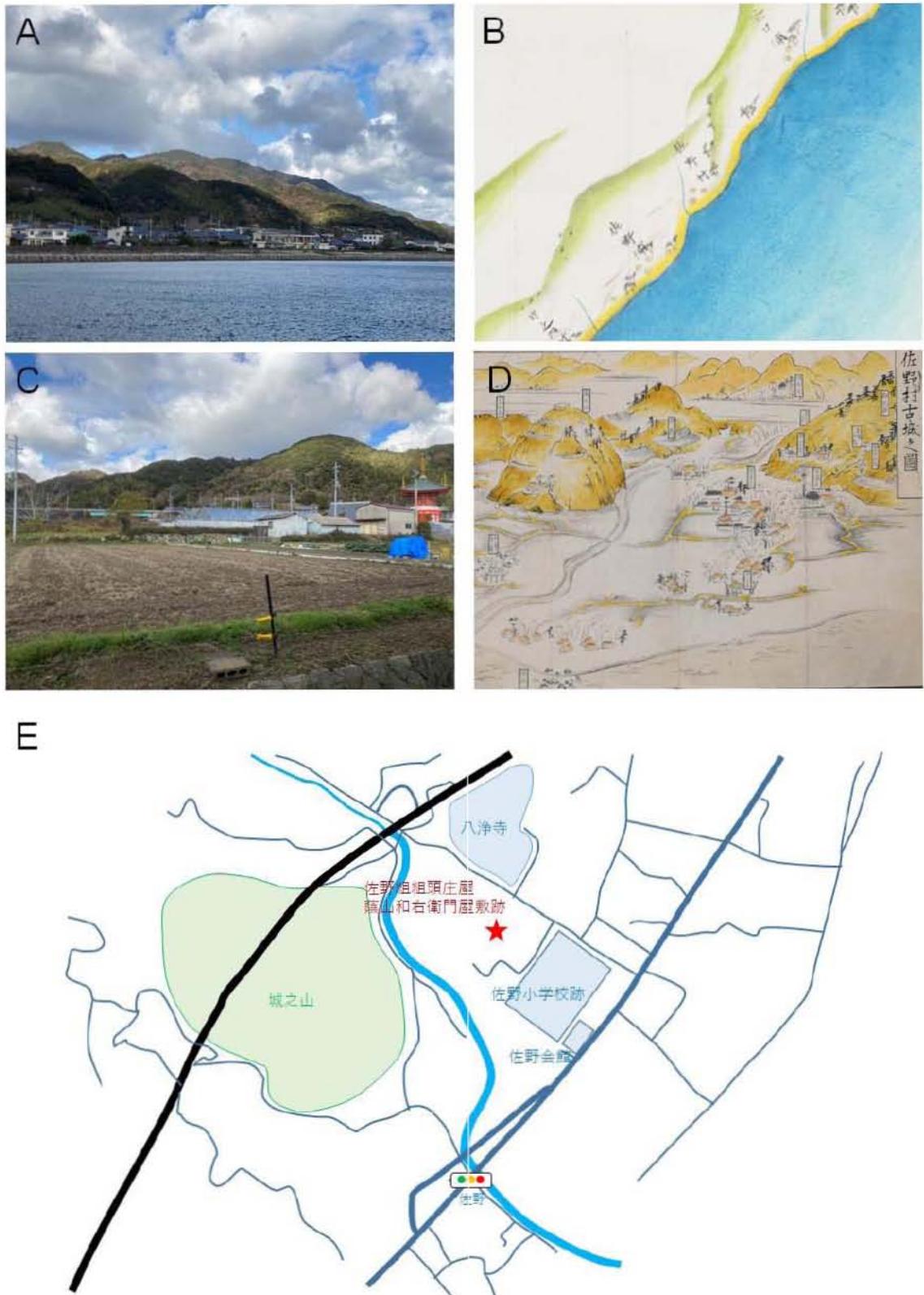


図1 佐野村と中食場所・蔭山和右衛門の家

(A) 現在の佐野の遠景、(B) 伊能大図の佐野村とその周辺（出典：国土地理院ウェブサイト「古地図コレクション」の「伊能大図彩色図」137）、(C) 佐野組頭庄屋・蔭山家の屋敷跡。写真中央部に屋敷の石垣の一部と思われる石積みが残っていた。(D) 淡路国名所図絵（兵庫県立歴史博物館蔵）の蔭山家の屋敷周辺。屋敷は浄満寺（現在は八淨寺）の南にあった。(E) 佐野の略地図内の蔭山家の屋敷の跡地



図2 志筑浜村及び志筑浦と、宿の忍頂寺仁三郎の家（本陣）と島屋・菅平兵衛の家（脇宿）

(A) 現在の志筑の遠景、(B) 伊能大図の志筑浜村の周辺（出典：国土地理院ウェブサイト「古地図コレクション」の「伊能大図彩色図」137）、(C) 志筑組頭庄屋・忍頂寺家の屋敷があったと言われる場所。現在は駐車場になっている。(D) 志筑浦の造酒家・島屋の菅平兵衛の屋敷跡。現在は家が立ち並ぶ住宅地になっている。(E) 志筑浜村と志筑浦の略地図内の忍頂寺家の屋敷と島屋屋敷の跡地

表3 山島方位記22の仮屋浦から志筑までの各地点での方位測量結果

年（一七九一）には庄屋最高の身分の小高取になつてゐる。忍頂寺氏は京都の公家とも接点があり、正徳二年（一七一二）に京都の外山中納言に「志筑」を手土産にしていて、外山中納言からの札状にも美味であつたことが触れられていて^⑨。忍頂寺氏は、幕府役人の御宿を勤めたこと、徳島藩主の淡路巡国^⑩のたびに御宿を勤めていたこと、志筑は淡路島の中央付近にあるため、諸士往来の宿や休息所に多く使われていたこと、がわかつてゐる^⑪。現在は忍頂寺家の屋敷は無く駐車場になつてゐる。平成二十年頃の時点であるが、子孫の本家の方は東京にいらつしやるようである。

島屋の菅平兵衛は造り酒屋で、旅中日記に「此内家作り大造成事」とあるように、当時「志筑島屋を沖から見れば 外は白壁 内小判」と言われたほど、屋敷は大きく繁盛していた^⑫。島屋は藩の御宿御用も勤めており、伊能忠敬一行の三月と十一月の宿や幕府の巡見使等の宿に使われた（表4）。旅中日記の「江戸六、七千石ニも所領」については情報が見つからず確認できていない。菅家は寛政元年（一七八九）に苗字帶刀を許されている^⑬。

菅平兵衛の先祖は、備前金川の生まれで、姫路藩主だった池田輝政の第三子の池田忠雄の時に従つて淡路に来島し、徳島藩主が蜂須賀家に替わった後もそのまま志筑に住み続けた。志筑に移り住んだ初代の平兵衛は正保三年（一六四六）に没しているが、当時武士身分でなくては付けなかつた仮号が付いているため、武士の土着したものと考えられている。その後二代平兵衛と三代平兵衛重規は船を持ち廻船業を行い、重規の頃より造酒を始め明治になつても続けていたようである。

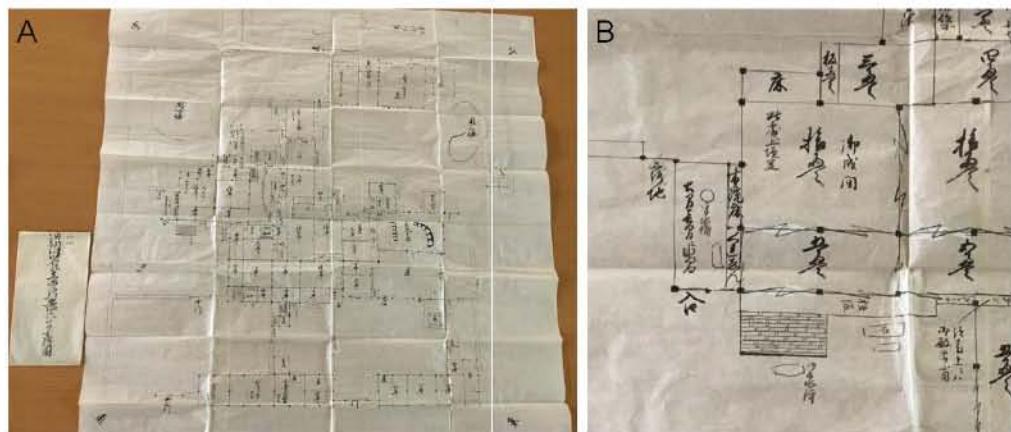


図3 志筑組組頭庄屋・忍頂寺家の屋敷図（国文学研究資料館蔵）

(A) 屋敷の全体、(B) 写真 (A) の中央左側に十畳の御成間（領主座敷）が確認できる

表4 志筑浦の島屋が御宿御用を勤めた事例^⑭

延享三年（1746）	幕府巡見使御宿（御目付様のうち神谷佐内宿）
宝暦十一年（1761）	幕府巡見使御宿
寛政元年（1789）	幕府巡見使御宿（目付細井隼人以下35人と徳島藩家老）
文化五年（1808）	天文方御役人（測量方）御宿
文化九年（1812）	御姫様御宿
文化十年（1813）	徳島藩主御宿
文政三年（1820）	徳島藩家老池田大隈（八千石）有馬入湯御宿
文政五年（1822）	藩主御成り
天保九年（1838）	幕府巡見使三枝平右衛門ほか32名御宿
天保十二年（1841）	幕府廻船改め役人御宿
安政二年（1855）	幕府海岸見分勘定奉行大久保右近将監様御宿
安政六年（1859）	藩主御宿

(4) 淡路島の測量で随行した医師・喜田晴庵

(4) 淡路島の測量で随行した医師・喜田晴庵
喜田晴庵は曾祖父の喜田台賢から代々続く市村
〔現・南あわじ市市市「いちいち」〕の医師で、測

屋敷跡は明治末期には藪になつていたようである。今後は文化五年三月七日以降の淡路島の測量について掘り下げていきたい。

●
文献

- ① 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十二卷 解説』イノベディアをつくる会(二〇一七)

② 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十三卷 解説』イノベディアをつくる会(二〇一七)

③ 北山學『銘細郡村仮名附抄録版』友月書房(二〇一二)四四六九頁

④ 曙鐘成『淡路國名所圖繪 卷之一』近藤雄太郎(一九三五)一ノ四十八

⑤ 仲野安雄『重修 淡路常磐草』臨川書店(一九八九)一〇五、一五頁

⑥ 渡辺一郎監修、前掲書①

⑦ 伊能忠敬研究会『忠敬と伊能図』アワプラニング(一九九八)一一六、一一〇頁

⑧ 渡辺月石『淡路堅磐草付蝦夷物語下巻』臨川書店(二〇〇三)三一、二二頁

⑨ 高田豊輝『阿波近世用語辞典』高田豊輝(二〇〇一)一五四、一五五頁

⑩ 津名町史編集委員会『津名町史 本編』兵庫県津名郡津名町(一九八八)一〇二、一〇一六頁

⑪ 渡辺一郎監修、前掲書①

⑫ 保柳睦美『江戸時代の時刻と現代の時刻』地學雑誌八六(五)(一九七七)二七二、一八四頁

⑬ 安永純子『伊能測量隊員旅中日記(上)』について『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要第六号』(二〇〇一)九九頁

⑭ 前田幸子『輿地実測録を読む』伊能忠敬研究 第八十六号(二〇一八)十二、一九頁

⑮ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四一三、四一六頁

⑯ 小西友直、小西錦江編『味地草第一冊』名著

⑰ 百周年記念誌編集委員会、前掲書⑩、一二二頁

⑱ 藤井容信、藤井彰民『淡路草 上巻』名著出版(一九七五)八一頁

⑲ 寺島良安『和漢三才図会7』平凡社(一九八七)一五六、一五七頁

⑳ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三三一〇、三二一頁

㉑ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇五、四〇六頁

㉒ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一一五、一四一頁

㉓ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇七、四一一頁

㉔ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇五、四〇六頁

㉕ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一一五、一四五頁

㉖ 小西友直、小西錦江編、前掲書⑩、五三八、五三九頁

㉗ 堂山達之介『ふるさと津名町誌概要』志筑印刷株式会社(一九八一)二七頁

㉘ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三一〇、三二一頁

㉙ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一〇〇八、一〇〇九頁

㉚ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三九六、三九九頁

㉛ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、一〇〇八、一〇〇九頁

㉜ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、四〇一、四〇二頁

㉝ 津名町史編集委員会、前掲書⑩、三九六、三九九頁

㉞ 日下初子『喜田一統の系譜 — 淡路島福永村 —』大野印刷株式会社(一九七四)一三七、一四〇頁

史料紹介

門谷清次郎『薩隅見聞之覚書』

玉造功

はじめに

門谷清次郎の『薩隅見聞之覚書』は駒井乗邨の『鷺宿雜記』に収められており、国会図書館デジタルコレクションで原文を閲覧することが出来る。測量隊員が残した記録は第六次測量の柴山伝左衛門の『旅中日記』が知られているだけであり、貴重な史料といえよう。

覚書には駒井乗邨の次のようなコメントが付されている。右の書は、文化九年に測量御用の伊野（伊能の誤記）勘解由（忠敬の隠居後の通称）の門人の門谷清治郎が、種子島から鹿児島に帰着して二十五日に留守宅に出した書状のうち、薩摩と大隅で見聞した内容であると記している。忠敬が娘の妙薰宛に出した書状も同じ日付けであり、『測量日記』の五月二十六日に江戸行きの書状を薩摩側に渡したという記事とも符合している。

覚書の内容は一見したところ、家族宛の私的な内容もなれば、測量の様子を報告するものでもないよう、あくまでも薩摩と大隅（屋久島、種子島）の概要と見聞記のようである。鹿児島城下からは箱田良助、尾形謙二郎、保木敬藏、加藤嘉平次が妙薰に書状を出している。彼らもそれぞれの家族宛てに書状を出していたはずである。測量隊員は、家族宛とともに、留守宅を経由して所属長宛、友人知人宛にも書状や見聞記を送っていたのではないだろうか。

門谷清次郎

門谷清次郎常久の名が登場するのは第五次測量

からである。文化二年八月十一日に景保が受け取った忠敬の書状（『高橋景保御用日記』会報六十六号）の「金助病氣並び内弟子父大病に付帰国」という記事や、『測量日記』の文化二年八月二十六日の「門谷は市野と共に帰府に付て、僕伊兵衛を侍に致し手伝にす」という記事から、門谷は忠敬の内弟子であり、忠敬の供侍として測量に参加していたことがわかる。

文化四年五六日付の大川治兵衛に宛てた忠敬の書状（『伊能忠敬未公開書簡集』）には、第五次測量後の江戸黒江町の隠宅での地図仕立ての様子が記されている。その中に「内弟子隼太、秀藏、慶助、伊兵衛、門谷五人」とあり、門谷は測量だけでなく、地図仕立てにも従事している。

第六次測量以降の『江戸日記』『測量日記』に門谷の名はない。第八次測量からは天文方の手付下役として再登場し、第九次伊豆七島測量、第二次江戸府内測量にも参加している。

絵が得意であったようで、文化四年一月二十一日付の高橋景保が忠敬に宛てた書状（『埼玉大学紀要十七号』、『天文曆学諸家書簡集』所収）に絵図物仕立てのため画工の代わりに門弟の門谷清次郎を二日ほどお借りしたいと依頼している。ただし門谷は絵師ではない。いうまでもないが忠敬が内弟子に教えたのは測天量地である。第五次測量中の『測量日記』の文化二年六月八日の記事に忠敬、市野、門谷が止宿に残って推算したとあるように推算の要員でもあった。絵の才能は能絵図や地図仕立てでも發揮されたことであろうが、あくまでもそれは余技である。御家の子弟で天文方の手付下役になつたということは、坂部貞兵衛、市野金助、下河辺政五郎等と同様に、和算の人脈

に連なる人物ではないのだろうか。

門谷についての記録の最後は、シーボルト事件に連座して処罰されたことである。『鷺宿雜記』卷二五一にも「天文方高橋作左衛門御仕置一件」という記事があり、その中に、

江戸十里四方追放

御細工所同心組頭改方勤方八郎右衛門伴

同断手付曆作測量御用出役

門谷清次郎 四十七

と記載されている。

『鷺宿雜記』

『鷺宿雜記』は駒井乗邨（号は鷺宿）が約三十年間にわたって書き留めた六百巻に及ぶ叢書である。駒井は久松松平家の家臣で、松平定信の側近として約三十年間も仕えた。『鷺宿雜記』の項目を見ると、駒井は市井から幕閣に至るまで様々な情報に接する立場にいたようである。『鷺宿雜記』の中でも有名なのは「よしの冊子」である。「よしの冊子」は定信の側近であり駒井の和歌の師でもあった水野為長が天明～寛政期の江戸城内や市中の風聞を収集して定信に伝えたもので、若年寄堀田正敦に関するものは会報人二号で前田幸子会員が紹介している。

『鷺宿雜記』は国会図書館デジタルコレクションで公開されているとはい、あまりにも膨大であるため、個々の内容に近づくことは困難を極めていたが、最近、『鷺宿雜記』ウェブ索引が国会図書館のリサーチ・ナビで公開された。「か」のボタンをクリックすると行の項目一覧があらわれ、「門谷清次郎薩隅見聞之覚書」をクリックすると、『鷺宿雜記』卷四六三の該当ページを開くことが出来る。どなたか翻刻を御願いします。

江戸府内第一次測量の記録（五）
—文化十二年二月九日の「日記」—

—文化十二年二月九日の『日記』—

玉造功

二月九日の測量は千住宿と江戸府内を繋ぐものであつた。千住宿は第一次測量の出発・帰着、第二次測量の帰着、第三次測量の出発地点である。

二月九日晴天 大通 室町一町目 入口木戸、當月三日残し
印始め 室町一町目 右横町安針町という
右横町小田原町という

奥州街道追分本印を残す 三町十二間
左御堀端迄本町二丁目通
四町ばかり御堀端は一丁目とす

左御堀端迄本町二丁目通
四町ばかり御堀端は一丁

右左
十軒店

町入口の(ト)印から測量を始めた。日本橋北詰は中山道と奥州街道（宇都宮までは日光街道と重複する）の始発点である。(本)印で奥州街道が東側に、(ワ)印で中山道が西側に分岐する。測量隊は上野山下を経て下谷道を進み、千住大橋の手前(天)印で奥州街道に測線を繋いだ。

・(ト)印：一月三日の『日記』に、測量隊は南側から日本橋を渡り「室町壱町目入口打止め、(ト)

左石横町 左横丁左石左名新道左側 本筋二丁目左右
左名新道左側 本筋三丁目左右 横町

左右横町
左横十軒店
右本町三町目
左右共新道左側本石町
右側 二丁目 本石町三町目
横町

又右様町主丁目新道り
石今治町主町目
本銀丁石主丁目
左様子本銀町目り
今川橋渡中立
是ヨリ

又右横町三丁目新道という
右 本 銀 町 三 町 目

本 銀 丁 (右三丁目)
左 二 町 目

(右横町本銀町三丁目)
左横町本銀二町目という

今 川 橋

渡巾五口(間力
是 よ り り)

駿河町……図4の上部に「日本橋通り北の方なり。この辺すべて繁華なるうへに、三井前後の店殊に名高く、見世のかかり、土庫(ぬりごめ)のさま實に目を驚かせり。この所にて西の方を臨めば富士が嶺正面にして、四時絶景なり。ゆえに駿河町の名あり」と記されている。越後屋、奥に江戸城、遠景に富士山という組合せは、江戸繁栄を象徴する画題であつた。

から日本橋を渡り「室町壱町目入口打止メ、印ニ畢ル」と記されている。図3に描かれた室町一町目入口の木戸の柱のどちらかであろうか。なお画面左下の木戸に続くのが魚河岸である。

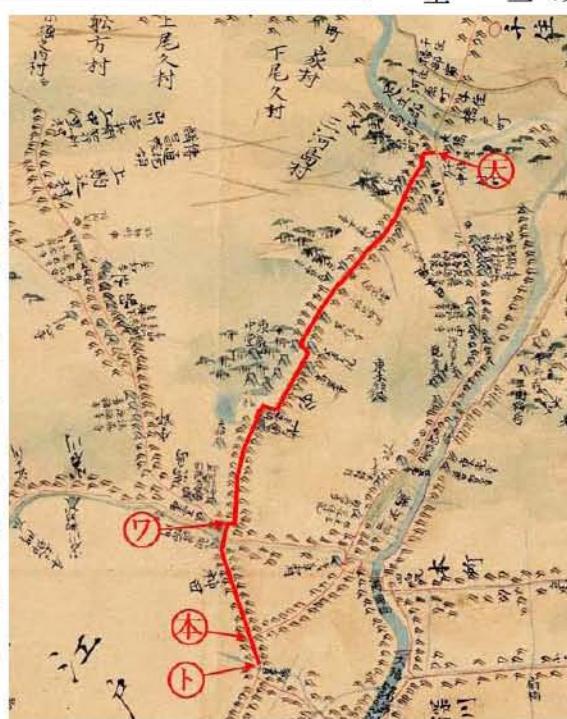


図1『大日本沿海輿地図』に加筆



図3 日本橋北詰（広重『日本橋真景并ニ魚市全図』部分・加筆）



図2 『江戸実測図(南)』に加筆

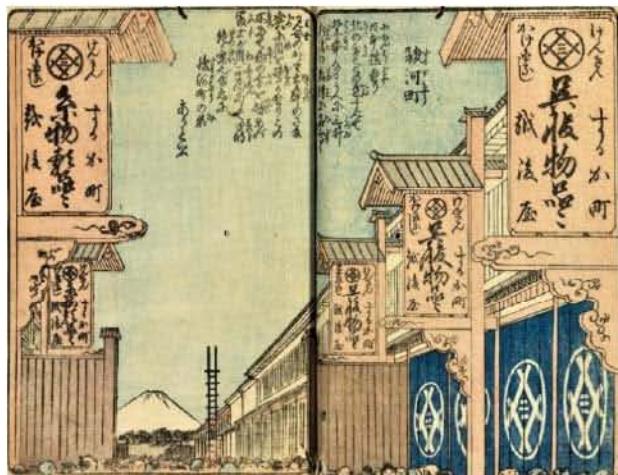


図4 駿河町（広重『絵本江戸土産』）

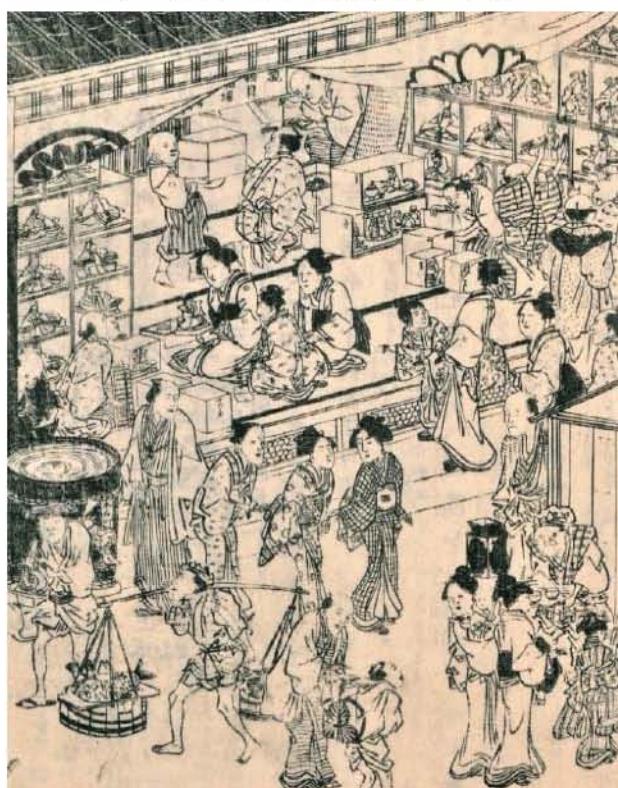


図5 十軒店雑市（『江戸名所団会』部分）

『江戸名所団会』には、「神田須田町より南へ今川橋、日本橋、中橋、京橋、新橋を経て金杉橋あたり迄」を総称して「通町」といい、越後屋を筆頭とする表店が連なる空間であった。

浮世小路：室町三丁目東側の伊勢町堀の掘留までの短い横町である。浮世小路には高級料亭百川があつた。忠敬とも交流のあつた漢詩人の菅茶山は出府のおり百川で開かれた書画会に招かれて、亀田鵬斎、太田南畝、大窪詩仙、菊池五山らと交友を深めている。

奥州街道追分：本印で奥州街道・日光街道は右折し、浅草をへて千住宿へと向かう。

十軒店：名前の通り長さ二十間ほどの小さな町であった。図5の『江戸名所団会』の本文では、桃の佳節には雛市が立ち、内裏雛などの店が軒端を並べ、端午の節句には五月人形の市が立ち、年の暮れには春を迎える破魔矢・羽子板を賣り、「その市の繁昌言語に述べ尽すべからず。

実に太平の美とも云はんかし」と記している。

本石町三丁目：本石町三丁目北東角地には長崎屋という薬種問屋があり、オランダ商館長一行が江戸へ参府した際の定宿であった。

文政九（一八二六）年にシーボルトはオランダ商館長の江戸参府に同行して長崎屋に滞在した。『江戸参府紀行』（吳秀三訳）の旧暦四月一日の記事に「天文方グロビウス（高橋景保）の訪問あり。江戸の地図及び薩吧連（サハリン）の立派なる地図を齎（もたら）らして示せり」とある。

「江戸の地図」は江戸府内図であろうか気に入る所である。なお、斎藤信の訳文では「蝦夷・樺太の素晴らしい地図」としている。

旧暦四月九日の記事には「グロビウス來り。日本のいと美事なる地図を示し、余のために之を周旋すべしと約せんが、後に之を果せり」とあり、シーボルト事件の発端が記されている。

鍛治町：鍛治町の西側の裏通りの下駄新道には表通りの大店とは異なる空間が広がっており、図6のよう下駄職人や販売業者が集まっている。図中の店の小上がりでは、店の主であろうか、そろばんを持って、束ねた鼻緒を前にして客と商談をしている。土間では職人が上半身裸に鉢巻姿で鼻緒を通す穴を錐で開けている。店の前には穴を開けられた下駄が重ねられ紐で結わえられている。路上にはおもちゃを持った子供を背負う女性、其の視線の先では職人が女物の下駄に漆を塗りながら話しかけている。

御石橋と小流：『江戸名所図会』に、神田鍛治町の通りを横切つて東の方へ流れる溝を、俚諺に逢初川あるいは藍染川と呼ぶとある。図7の「鍛治町」と「町目」の文字の間に描かれた「小流」が藍染川であろう。図7をよく見ると「御石橋」も描かれている。



図6 下駄新道(『江戸名所図会』部分)

の上屋敷。江戸府内測量の頃は図8の左上の火の見櫓のある屋敷がそれであつた。

津田家：図7の朱枠で囲んだ津田壮之助は佐原村の領主である。津田家は微禄の御家人であつたが、壮之助の祖父第四代信之の姉の知穂（千穂）が将軍徳川家治の側室として嫡男の家基の生母となつたことから六千石の大身旗本に出身し、神田佐柄木町に一七八七坪余の屋敷を、小日向鼠坂上に下屋敷一九〇坪余を拝領した。

佐原村は安永六（一七七七）年に津田家の知行地となつたので、忠敬は村役人として津田家屋敷を度々訪れている。忠敬は幕臣となつてからも測量の出立や帰府の挨拶、年始や暑中見舞いに佐柄木町に足を運んでいる。

筋違御門：筋違御門の前は図8のよう火除地の広場となつており、八方に道が通じたことから「八辻原」「八ツ小路」などと呼ばれた。

⑦印始め：⑦印から⑦印までは二月七日に測量しているので測量せずに進み、⑦印から測量

を再開した。⑦印から西側に中山道と日光御成街道が分岐する。

日光御成街道と御成道：この記事や二月七日の記事から見ると、「日記」では⑦印の追分から下谷・上野山下を経て千住で日光街道に合流する下谷道も「千住通日光御成街道」として将军の日光社参路としている。しかし、日光社参の将軍は岩槻城を初日の宿所とするため、岩槻城を通らない千住経由の日光街道を御成街道（御成道）とすることはない。筋違御門から下谷を経て将軍家菩提寺の上野寛永寺への社参路も「下谷御成道」と呼ばれるので混同したか。

代地：図7の下谷御成道の東側は須田町代地など代地が続く。寛政五年の大火で湯島・下谷・神田から日本橋河岸まで焼失した際に、筋違橋から和泉橋までの神田川両岸の町々が帶状に火除地として上地された。代わりに御成道の東側の旗本屋敷を上地し、そのあとを各町の代地として与え、町奉行支配地に改めしたことによる。



図7『江戸実測図(南)』に加筆

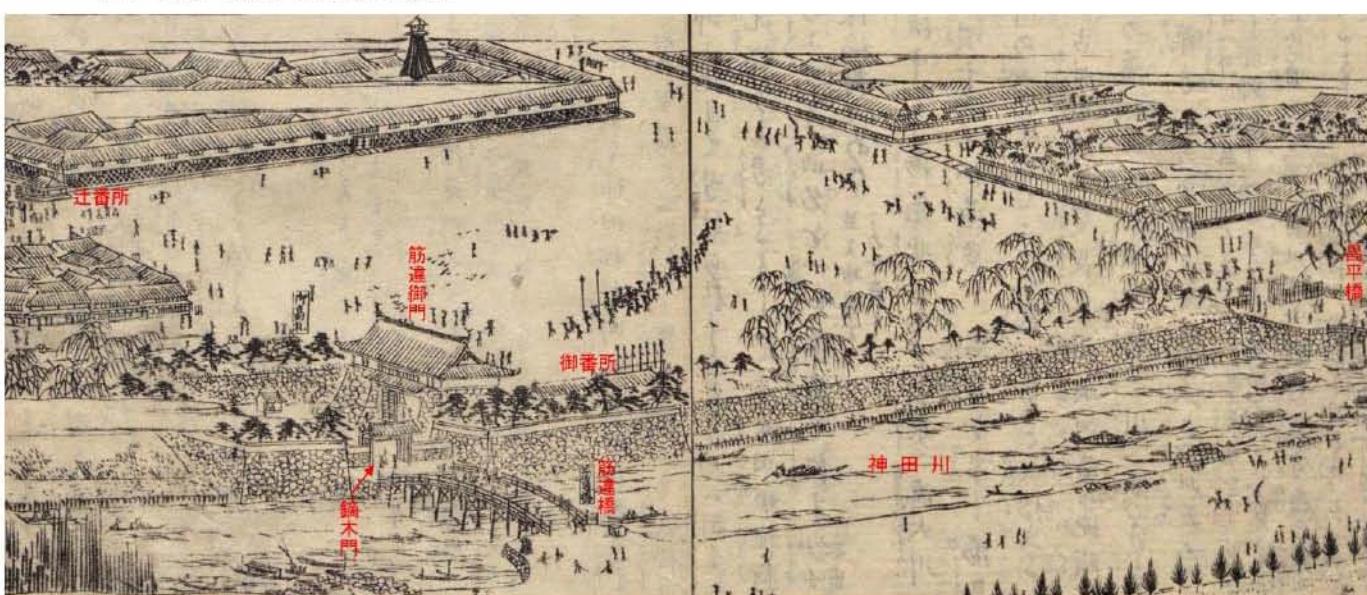


図8 筋違ハッ小路(『江戸名所図会』部分・加筆)

岩井町代地を過ぎると下谷御成道の両側は武家の屋敷が続く。西側には越後村松藩の堀丹後守直庸の上屋敷、安房勝山藩の酒井大和守忠嗣の上屋敷、上総久留里藩の黒田豊前守直候の上屋敷、伊勢亀山藩の石川主殿頭総佐の上屋敷が続く。石川総佐は自らオランダ語などを学び、藩内で蘭学振興をはかったという。その影響もあってか、「江戸日記」の文化十二年九月二十五日の記事に「勢州亀山藩由良渓右衛門入門、看代金二百疋」とあり、伊勢亀山藩から忠敬のもとに入門者があった。前年の三月十七日に由良渓右衛門は亀山代官として第八次測量の帰路の忠敬のもとを訪れている。

- ・ **新黒門町**からは町家となる。下谷の広小路に入ると東側に図 10 の松坂屋が店を構えていた。暖簾には松坂屋の商標「いとうまる」が染め抜かれている。下谷広小路は明暦の大火後に寛永寺の門前に火除地として設けられた。なお、下谷は台地である上野に対する低地という意味での名称である。
- ・ **渋江新之助屋鋪**： 渋江新之助直影は忠敬が所属する小普請組の組頭であり、『江戸日記』に頻繁に登場する。様々な書類の提出、出立や帰着の届、暑中見舞や新年の挨拶等忠敬が度々訪れたのがこの屋敷である。渋江は三百俵の蔵米取りで、この屋敷は二百九十三坪あつた。
- ・ **小笠口口口口夫中屋敷**： 図 9 のように豊前小倉藩の小笠原大膳大夫忠固の中屋敷である。
- ・ **井上滝吉口口**： 下総国高岡藩一万石の上屋敷。井上滝吉は江戸府内測量の二ヶ月前に筑後守に叙任されていたが、『日記』と図 9 で表記が異なつてしまつた。虫損個所は「屋鋪」であろう。
- ・ **常楽院と六阿弥陀横町**： 春秋の彼岸に下町の六ヶ寺の阿弥陀様を巡拜する六阿弥陀詣が流行した。『東都歲事記』では五番の常楽院から始め



図9『江戸実測図(南)』に加筆

ることを勧めている。「六つに出て六つに帰る六あみだ」というように、明け六つから暮れ六つまでの一日がかりの巡拝であった。

・三ツ橋：『御府内備考』によると不忍池から流れれる忍川に三つの橋が並んでいるので三橋と呼ぶ。中の橋は御成道で幅が六間余。

・瀬川小屋：『御府内備考』によると瀬川屋敷は御連歌師瀬川昌惇の拝領町屋敷。

・上野山下火除明キ地：山下は東叡山の下といふ意味。元文二（一七三七）年の火災の後に火除け地となつた。町屋は置かれず、床店、よしす張の水茶屋、見世物小屋が立ち並び、両国広小路と並ぶ歓楽地となつた。図11の左側の「かるわざ」は高い櫓に幟がはためいている。近く

の茶屋では「あわもち」を商つている。「ものまね」の小屋の舞台には一人の芸人がたち、「講尺（釈）」の小屋の手前側の高座に座つているのが講釈師であろうか。「見世物」の小屋の看板に描かれているのは何であろうか。「曲馬」の見物席は二階建てである。路上の「居合抜」を見物人が遠巻きにしている。

・啓雲寺：『寺社書上』で確認すると啓運寺の誤記である。

・御徒組屋敷：御徒組は十五組からなり、各組は御徒頭一名、組頭二名、御徒二十八名で、将军の御成の行列を先導・警護した。組ごとに大縄地として一括して屋敷地が与えられ、下谷には御徒組の組屋敷が集まつていた。



図10 下谷広小路(広重『名所江戸百景』)

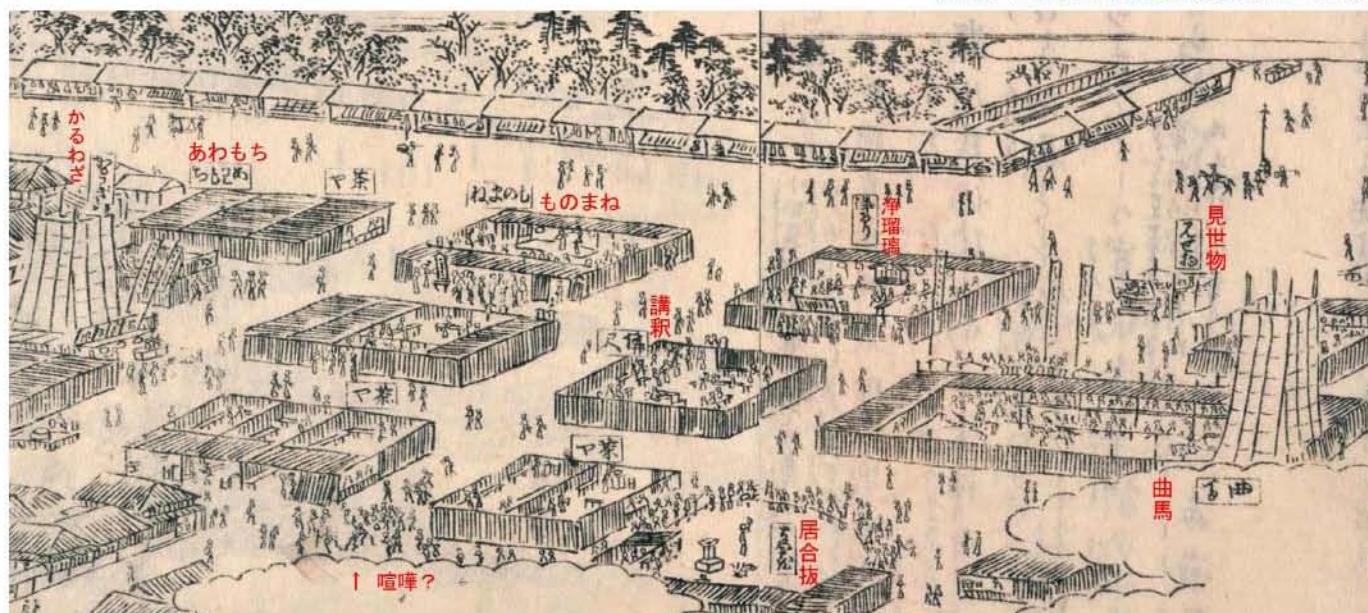


図11 山下(『江戸名所図会』部分・加筆)

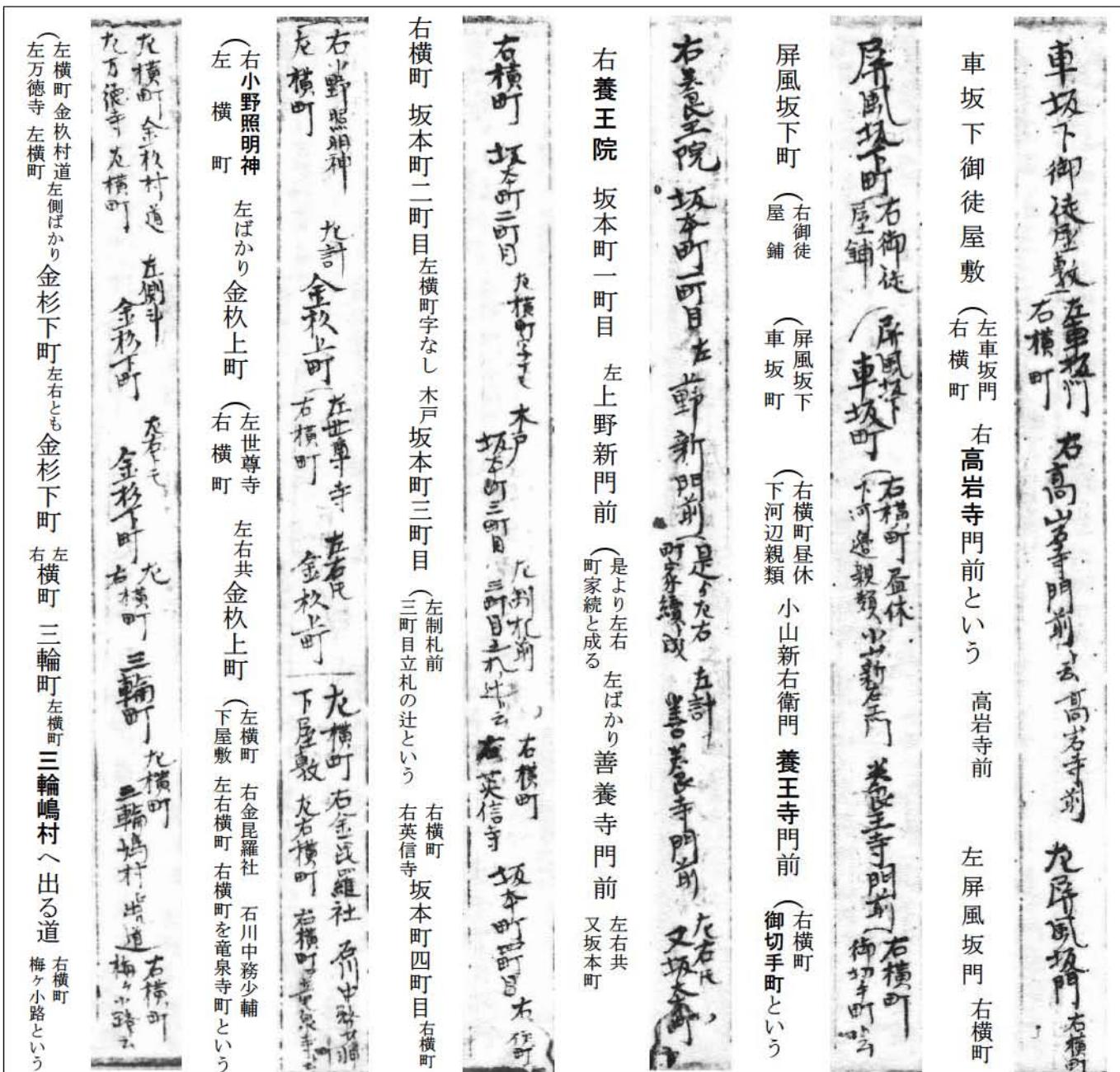


図 13 上野惣絵図
(『江戸城内并芝上野山内其他御成絵図』)

繁華な上野山下火除明地が終わると、図12の測線の西側には堀や塀で隔てられた寛永寺の子院群東側には御徒組屋敷や寺院が続く。

東叡山寛永寺は江戸城鎮護のため鬼門に当たる上野忍岡の地に開かれ、徳川将軍家の祈禱所・菩提寺として大名並みの寺領一万千七百九十石を

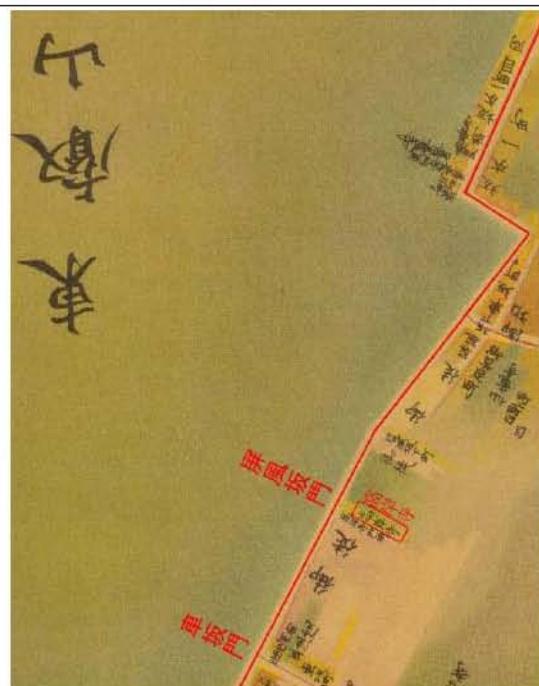


図12『江戸府内図(北)』に加筆

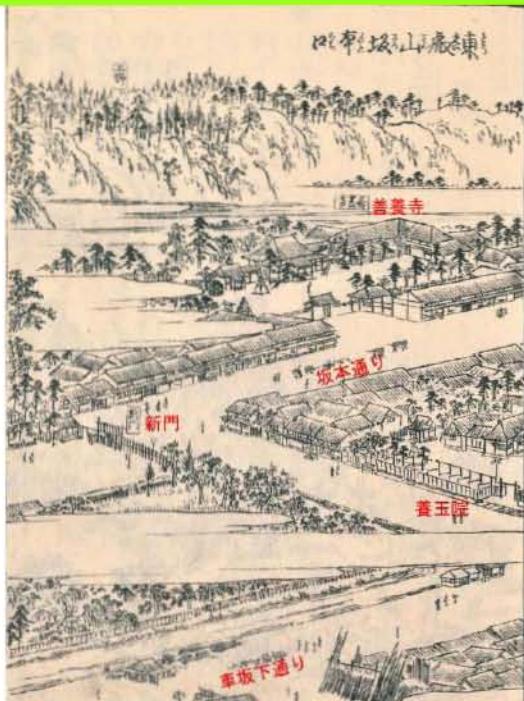


図14 東叡山坂本口
(『江戸名所図会』部分・加筆)

拝領した。図13の「上野惣絵図」のよう
に、境内には根本中堂などの諸伽藍、徳
川家の靈廟、法親王である輪王寺宮の本
坊や諸大名らの寄進による三十六坊の
子院が威容を誇っていた。江戸府内図で
は測量対象外の寛永寺の広大な寺域に
は「東叡山」と記すのみである。

図15の坂本町から金杉上町、金杉下
町、三輪（三之輪、箕輪）町へと下谷道



図15 『江戸府内図(北)』に加筆

して幽趣あるが故にや、都下の遊人多くは
ここに隠棲す。花になく鶯、水にすむ蛙も、
ともにこの地に産するもの。其声ひとふしあ
りて世に賞愛せられはべり」と記す。
・高岩寺：『寺社書上』で確認すると、図12
の「高岸寺」は誤記であり、測量日記の「高
寺」が正しい。明治時代には巣鴨に移転した。
・養王寺と養玉院：『寺社書上』で確認する
と、測量日記の表記は両方とも誤記であり、
図15の「養玉院」が正しい。

に沿って町場が続く。下谷道沿いに形成さ
れた町家が、金杉村や三輪村を東西に分断
するかたちで町場となり町奉行支配に移行
した。

閑静な住まいの里として知られてい
た根岸はこの地域にあった。『御府内備考』

には「金杉村内の小名なれど、下谷に続ける
金杉町近き地にして、殊にその名世人の知
る所なればこれを載せぬ」と特記している。
図16には「吳竹の根岸の里は上野の山陰に

・御切手町：御切手同心の拝領地が町屋敷とな
ったことから御切手町と称した。『国史大辞典』
によると、切手とは大奥関係の通行証のことで、
御切手同心は江戸城本丸の裏門（大奥に通じる
切手門）を警護、そこを出入りする荷物や大奥
女中の切手を検査した。

・小野照崎明神：図15の小野照崎明神が正しい。
・三輪嶋村：『御府内備考』には三輪町の隣町
として「西の方三河島村」とあり、三河島村の
誤記か。

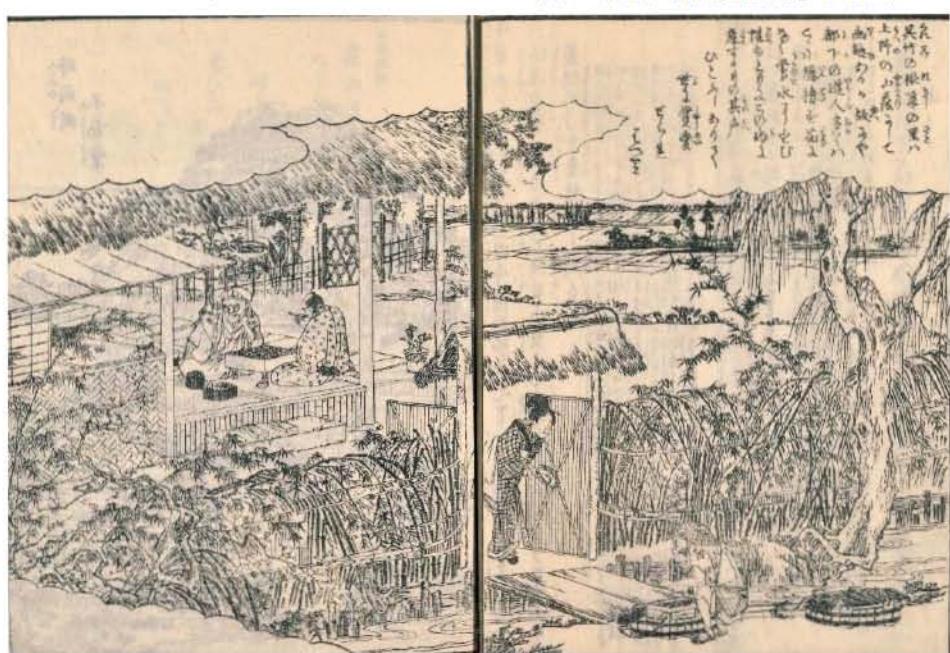


図16 根岸の里 (『江戸名所図会』)

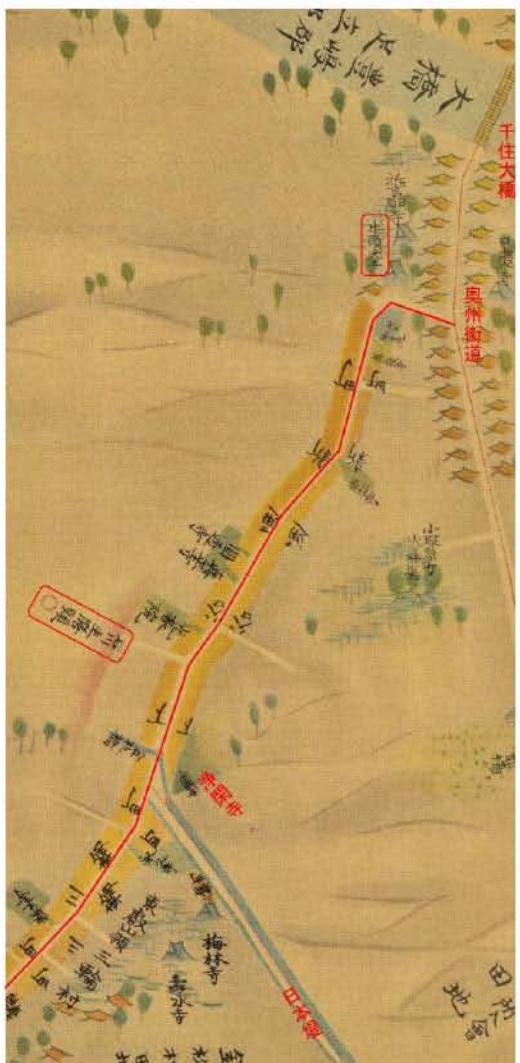


図 17 『江戸府内図(北)』に加筆



図 18 日本堤之櫻(英泉『東都花曆之内』)

・**浄閑寺**：図18の浄閑寺も新吉原に関係深い。「生きては苦界、死しては浄閑寺」といわれたように、投込寺と呼ばれ新吉原の遊女や遊郭関係者を葬った。

測線は下谷道を北上し、三輪町から下谷通新町を経て牛頭天王社前で右折し、奥州街道（日光街道）に合流して、この日の測量を終えた。この日の八ツ時は午後二時頃であつた。

・ **日本堤**： 浅草聖天町の今戸橋から北西方向の三輪の淨閑寺にかけて山谷堀に沿つた土手。日本堤から新吉原へと通じていた。

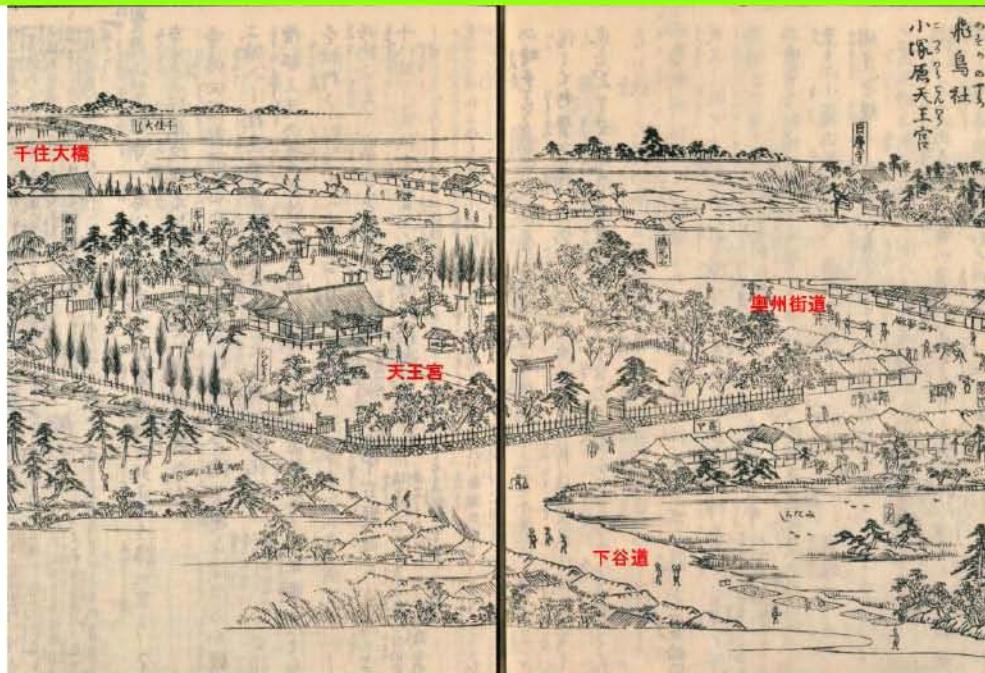


図19 飛鳥社・小塚原天王宮（『江戸名所図会』部分・加筆）

田村権右衛門支配：田村権右衛門は東叡山目代として寛永寺の寺領管理などの事務一般を司つた。代々田村権右衛門を襲名。

石川千勝屋敷：伊勢亀山藩の石川主殿頭總佐の下屋敷。武鑑で石川千勝總佐と記載されたのは、文化六年十二月十六日に主殿頭に任官する以前である。

牛頭天皇：牛頭天王のこと。牛頭天王は様々な神仏が習合した神で、祇園精舎の守護神、蘇

な神仏が習合した神で、祇園精舎の守護神、蘇民将来説話の武塔神、薬師如来の垂迹、スサノオの本地ともされた。疫病退散を願う祇園祭とともに全国に広がった。明治時代の神仏分離により、スサノオを祭神とする八坂神社、様々に表記されるスサノオ神社などに再編された。

【図版の出典】

- 『日記』の図版は香取市立伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。
- 『江戸実測図（南）』は国土地理院ウェブサイトの古地図コレクションによる。
- 『江戸府内図（北）』は『東京市史稿市街篇附図第三』による。
- 図1、3、4、5、6、8、10、11、13、14、16、18、19は国会図書館デジタルコレク



図20 千住宿小塚原町付近（『日光道中分間延絵図』部分・加筆）

ションによる。

図20は東京国立博物館所蔵である。

【参考史料】

『文恭院殿御実記 卷四十四』

『御府内備考』

『新編武藏風土記稿』

『町方書上』『寺社書上』

『日光道中分間延絵図』

『諸向地面取調帳』

『寛政重修諸家譜』

『武鑑』（文化十一年・十三年）

『江戸名所図会』

『武江年表』

『江戸（東都）歳時記』

【参考文献】

『幻の料亭「百川」ものがたり—絢爛の江戸料理』小泉武夫 新潮社

『大江戸日本橋絵巻』『熙代勝覧』の世界』吉田伸之他 講談社

『シーボルト江戸参府紀行』吳秀三訳

『江戸参府紀行』斎藤信訳 平凡社 東洋文庫

『東京市史稿 市街編三十三』 東京市役所

『江戸名所図会を読む』川田壽 東京堂出版

『江戸庶民の四季』西山松之助 岩波書店

『江戸の町かど』伊藤好一 平凡社

『下谷区史 本編』 東京市下谷区役所

『亀山市史』ウェブ版

『続忠敬未公開書簡（一）』渋江新之助

伊藤栄子 会報三十九号

伊能図に描かれた現存十二天守（一）

会報九十四号から四回の予定で始めた連載の二回目である。前号で、伊能図に描かれた城は「まるでドローンを飛ばして得た空撮写真を見て描いたように俯瞰的である。伊能隊が城下の街路から見上げて描いた構図ではない。」と書いた。三年目にに入ったコロナ禍の中、今回もちよつとした紀行文を楽しんでいただければ幸いである。

犬山城（愛知県犬山市） 河崎倫代

伊能忠敬一行が犬山城下に入ったのは、第七次測量（九州一次）の帰路、文化八年三月二十日（一八一一年五月十二日）だった。『測量日記』によると、中山道鵜沼宿（岐阜県各務原市）を出立した忠敬、下河辺、青木ら五名は、南鵜沼で木曽川（川幅百二十八間九寸。約一三〇m）を渡つて犬山城下に入り、上本町の島屋与八宅に止宿。夜は晴れて天文測量をおこなつた。他方、支隊の坂部、永井、箱田ら五名は加納宿（岐阜市）を出立して、熱田・木曽追分より測量をスタート。里小牧渡場（愛知県一宮市木曽川町）で木曽川を渡つた。川幅は二百十二間、「遠測術にて求む」とある。三月二十二日、両隊は名古屋城下で合流した。



上・伊能大図（第118・114）、右・赤枠部分拡大図
『伊能図大全』（河出書房新社）2巻193p、3巻18pより転載



対岸の旅館（岐阜県各務原市）から見た犬山城（白帝城）



とんどが取り壊された。残った天守は、明治二十八年（一八九五）、愛知県から旧城主・成瀬正肥へ条件付き無償譲渡され、昭和十年（一九三五）国宝に指定された。以後、平成十六年（二〇〇四）まで成瀬家がこの巨大な「国宝」を所有していた。しかし、『測量日記』には、

犬山城と城下の記述は無い。「成瀬隼人正代官大野勘吾、小牧代官小山七郎兵衛手付吟味方志水幸左衛門、同心水谷仁平」が挨拶に来たとのみ記されている。伊能図には「美濃国各務郡・尾張国丹羽郡」の国境として木曽川が太く描かれ、「晴天測量」の結果の☆印が記されている。

私が犬山城下を訪れたのは、二〇一八年四月四日のこと。前夜の宿は対岸の木曽川辺に建つ岐阜県各務原市の旅館だった。部屋の窓からは木曽川の約八五尺の断崖に立つ犬山城が、咲き始めた桜花の向こうに見えた。まさに「後堅固（うしろけんご）の城」といわれる犬山城の雄姿だった。こんなに眺望のいい部屋に泊まつたことは無く、いつまでも見とれていた。

翌朝、絶景に別れを告げて出立。犬山橋（約二三尺）を渡ると、左の橋詰に「内田の渡し」の常夜燈があり、そこから鵜飼の遊覧船が出ている。犬山城を見上げながら鵜飼を楽しめる趣向だ。忠敬隊も船で渡河し川幅を測つたのだろう。

川沿いに犬山城までは歩くにはかなりの距離と勾配のある道だった。天守の高さ一九尺。階段は急勾配で、とみに足腰の弱つている身には危険極まりなし。ようよう天守最上階に至るも、望楼型の天守からの絶景を楽しむには、高所恐怖症を克服して回廊（廻り縁）に出なければならなかつた。眼下にはゆつたりと木曽川が流れ、直下には犬山城下の町並みが続く。遠くに白山、御嶽山、名古屋駅ビルなども見えるという。

城下町を歩く。戦災に遭わなかつた風情のある町並みの所々に「町名由来看板」が設置されている。伊能隊の宿所島屋のあつた「上本町」は、問屋場・高札場等があり城下の中心だったようだ。



急こう配の階段を恐るおそる降りる



町名由来看板「本町」

しかし、短時間の滞在では、島屋の情報は得られなかつた。

参考文献

山下景子著『現存12天守』

幻冬舎新書 二〇一一年

『古地図で読み解く城下町の秘密』

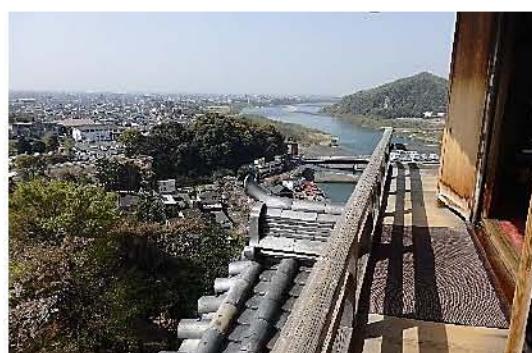
サンエイムック 二〇二一年



木曽川に架かる犬山橋
対岸は岐阜県各務原市



犬山城天守閣



犬山城下の町並み



対岸に「伊木山」が見える
伊能図では城側に描かれている

弘前城（青森県弘前市） 室山 孝

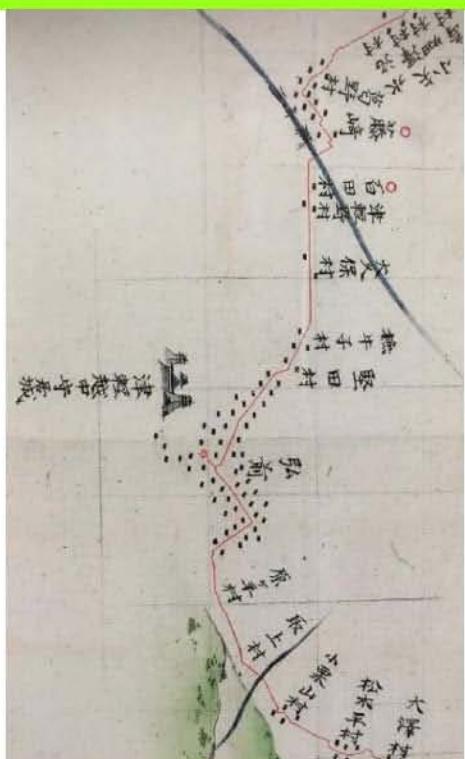
享和二年六月十一日（一八〇二年七月十日）、伊能忠敬は内弟子四人・下僕二人の総勢七人で江戸を出立し、奥州街道を北上した（第三次測量）。

八月二日、忠敬は滞在中の能代湊（秋田県能代市）から、津軽藩（四万五千石）の城下町弘前までの泊宿を出した。弘前は八日止宿の予定であつた。実は測量隊は能代に一日間滞在し、日食測量をしていた。天文測量を重視する忠敬にとって、日食測量は貴重な機会であり、まずその様子を、

忠敬が携行し記録した「忠敬先生日記」と江戸で書き改めた「測量日記」、また忠敬の書状（高橋至時あて）から見ておこう。

七月二十三日四ツ後、能代に到着すると、直ちに子午線儀の組み立てと設置に取りかかり、翌日午後完成。その夜は晴天で天測が行われた。しかし二十五日、忠敬は持病（痰と咳）を発症して床につき、翌二十六日には幕府若年寄堀田摶津守正敦が夢に出てきたという。

日食当日の八月朔日（太陽暦八月二十八日）、朝



伊能大図（第43）
『伊能図大全』1巻 146p (河出書房新社)

さて、測量隊はその後内陸を東へ進み、大館（秋田県大館市）から北上、奥羽の境界（青森・秋田県境）をなす嶮岨な矢立峠を越えた。八月八日、碇ヶ関（青森県平川市）の宿を出発、東方の八甲田山や北方の岩木山を方位測定しながら、八ツ後、ようやく弘前城下に到着。宿所は土手町の三國屋吉郎右衛門方であり、この夜晴れて（天文）測量、と「忠敬先生日記」には淡々とかかれているが、「測量日記」の翌九日条には、弘前で測量隊が受けた粗略

から曇り空で、午後は薄黒い雲で覆われて日影は全く見えず、「初虧食甚」（忠敬先生日記）は「初食甚」とする頃は雲がいつそう深くなり、「復円前」に漸く「濛影」（ぼんやりした影）が見えたので、これを大望遠鏡と「中望遠鏡」（書状は「小望遠鏡」とする）で測量したが、「復円頃」また雲に覆われて見えなくなつたとある。日食の欠け始めと最大食、終了時刻の測量は叶わず、きちんととしたデータは得られなかつた。三日、江戸の高橋至時へ書状を送り、四日、能代を出立した。

日食・月食等の測量は経度測定のため重要な作業であり、江戸・大坂と同時観測で得られたデータ（南中時刻と食の開始時刻）を対比（時間差から経度差を算出）して求められるものであつた。

時刻算定には、測量隊が携行した垂搖球儀という振り子時計を使つた。太陽の南中時刻を起点として翌日の南中までの時間（一太陽日）を垂搖球儀の目盛りで測り、同じように日食の開始と終了の時刻を測つた。なお、日食前日、大風雨のため垂搖球儀が止まるというハプニングもあつた。

さて、測量隊はその後内陸を東へ進み、大館（秋

田県大館市）から北上、奥羽の境界（青森・秋田県境）をなす嶮岨な矢立峠を越えた。八月八日、碇ヶ関（青森県平川市）の宿を出発、東方の八甲田山や北方の岩木山を方位測定しながら、八ツ後、ようやく弘前城下に到着。宿所は土手町の三國屋吉郎右衛門方であり、この夜晴れて（天文）測量、と「忠敬先生日記」には淡々とかかれているが、「測量日記」の翌九日条には、弘前で測量隊が受けた粗略

さて弘前城は、現在、東北屈指の桜の名所とし

弘前に到着したとき、町役人の出迎えはなく、町の入口に宿の下男が一人出て案内するのみであり、これでは町家の客引きと同じである。宿に着くとようやく亭主が袴姿で出迎えた。この三国屋は商人荷物問屋とのことで、諸国の商人が大勢相宿で、食事も粗末であった。測量隊の隊員には汚れた夜具が一人一つあて出されたが、弟子の中には風邪をひいている者もいたので、布団を二つ三つやつと借りることができた。

宿の亭主は津軽藩の御用諸賄いを請負う町人のようであつたが、到着時町役人も来なかつた。このままで領内測量も差し支えるので町役人を呼ぶと、宿老が一人やつて來た。このとき領主（九代津軽土佐守寧親）は青森町へ遊興のため出かけしており、青森止宿は差し支えるのではないかと云う。荷物の運搬、先々の海辺の道や宿所のことを尋ねても、この宿老は不案内でさっぱりわからぬ。そこで郡方か町名主とよく相談し、測量御用が差し支えないよう取り計らうように申し付けると、宿老は町名主や関係役人に相談し、村順と道程が少しわかつってきた。

公儀（道中奉行と勘定奉行）の御触が出され、

御勘定所のお声掛けもあり、海辺測量御用のことはわかっている筈なのに、津軽藩の地元はそのことを知らず、蝦夷地往来御用と同様と心得ているよう、等閑（なおざり）である。

と、忠敬は不満を記している。九日には津軽藩士竹内甚左衛門（第一次測量のとき忠敬に書状を寄こした人物）が領主からの菓子箱を持参し挨拶に來たが、忠敬の憤りは収まらなかつたのである。



内堀と天守（2005年8月、筆者撮影）

松と天守閣の
光景はしば
らく見られ
なくなつた
が、期間限
定で秀麗な
岩木山をバ
ックに写真
を撮ること
が出来る。
さて、享
和二年八月
十日、測量
隊は弘前城
下から北上
し、新城村

「測量日記」によると 松野も山鹿も青森での宿泊を勧めたが、すでに測量機器も設置したので油川止宿に決め、松野と共に青森へ山鹿を訪ねた。そこで、領主から下された菓子の御札をいい、弘前城下の町役人たちの不行き届きを申し立てている。また山鹿と松野に、三厩・小泊越えの難所での長持ち運搬の不安を述べ、長持ち一棹は油川より十三町へ村継で送りたいと相談し、その通りになつた。八月十八日、三厩（青森県外ヶ浜町）で忠敬は、山鹿が忠敬の訴えを受けて各方面に発した御触を見ており、「天文家伊能勘解由殿」に「角末之取扱無之様」と命じていたことがわかつた。

測量事業自体が軽んじられてはならないとの思いから、旧知の津軽藩士山鹿・松野という強い味方を得て、その後の行程に展望を切り開く契機としたのではないだろうか。

〔参考文献〕

- 『千葉県史料近世篇 伊能忠敬測量日記一』
千葉県、一九八八年

渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』NTT出版、
一九九七年

渡辺一郎『図説伊能忠敬の地図をよむ』河出書房
新社、二〇〇〇年

『青森県の歴史散歩』山川出版社、二〇〇七年

『伊能忠敬 日本列島を測る—忠敬没後二〇〇〇年
—(前編)』伊能忠敬研究会、二〇一八年

井上辰男・前田幸子「伊能忠敬の未公表書簡(一)」
『伊能忠敬研究』九十号、二〇二〇年

井上辰男・前田幸子「伊能忠敬の未公表書簡(二)」
『伊能忠敬研究』九十号、二〇二〇年

て知られる。別名「高岡城（鷹岡城）」といい、初代津軽為信が慶長八年（一六〇三）に築城計画し、同十六年、二代津軽信枚によつて完成した。平山城で六つの郭と三つの櫓、三重の堀から構成され、本丸と二ノ丸、五つの城門が残り、国の重要文化財に指定されている。当初の五層大天守は寛永四年（一六二七）に焼失し、現在の天守は文化七年（一八一〇）に隅櫓を改造して新築されたもので、「御三階櫓」と称され、ロシア船の監視など北方ににらみを利かせる拠点であつた。従つて伊能測量隊がやつて来た時、天守閣はなく、外からは隅櫓が見えるのみであつたようだ。

平成二十七年（一〇一五）、本丸石垣修理のため、天守の建物全体を本丸内側に約七〇メートル移動させる曳屋工事が行われた。石垣修理に一〇年、天守を元の位置に戻すのに六年見込まれる。工事のため埋め立てられた内堀の水面に映る桜と天守閣の

（青森市）に宿泊。翌十一日、青森町入りまで測量し途中の油川村（青森市）に戻って宿泊。その日の午後宿所に旧知の津軽藩士松野茂右衛門が来訪したので、



現在の天守と背景の岩木山 (提供: 弘前公園総合情報サイト)

松野茂右衛門と山鹿八郎左衛門は、忠敬の「江戸日記」にしばしば登場する。松野は、忠敬の友人で和算家の会田算左衛門の門人。江戸の忠敬を度々訪ね、忠敬の天文暦学の門人ともいい、第五次測量出発の文化二年（一八〇五）二月二十五日、会田とともに品川宿まで見送りに来ている。山鹿は山鹿素行を祖とする兵法家の家柄で、津軽藩の重職にあつた人物であり、忠敬も本所の津軽藩邸に挨拶等で二人を何度も訪ねており、交流は頻繁であったという。

なお、測量隊の宿所となつた三国屋は土手町にあつたが、詳細は不明である。現在、土手町通り（県道二六〇号線）は弘前の夏の名物「弘前ねぷたまつり」が練り歩く重要なコースとなつてゐる。

※本稿全体について玉造功氏のご助言、また津軽藩の松野茂右衛門・山鹿八郎左衛門について、前田幸子氏のご教示に感謝します。

彦根城（滋賀県彦根市） 相良 文昭

伊能忠敬一行は第五次測量の往路と復路に彦根城下に宿泊している。

文化二年九月二日（一八〇五年十月二十三日）、前日に泊まつた甘呂村（彦根市）から中藪村まで測量し、肴問屋広田七右衛門にて休憩した後、彦根城下の伝馬町（現彦根市中央町）に到着した。「肴問屋広田七右衛門」でネット検索をした結果、戸時代に魚屋が立ち並んでいた下魚屋町（現彦根市城町一丁目）に、魚問屋を営んでいた旧広田家住宅（屋号「納屋七」）が彦根市の「景観重要建造



伊能大図（第125号）

『伊能図大全』3巻48ページ（河出書房新社）より

根城の北東部にかなり広い水面（湖）が描かれているが、現在の地図には見当たらない。『測量日記』を開いてみたが、そこにも名稱は無く、測量隊は琵琶湖畔の松原村、磯村、筑摩村と測量し、米原宿に止宿している。後に入江内湖・松原内湖と呼ばれるこの二つの水面は、干拓が進められて今は陸地と化している。米原観光ボーダルサイ

ト「まいばらんど」による

と、入江内湖は広さが三〇haもあり、昭和初期ま

では船を使って湖内を往来していたという。明治六年に土を盛る干拓計画が

物”として保存されていることがわかつた。主屋の規模は桁行・梁間とも一五・五mの切妻造り。内部は二列六室となつていて。おそらく、このど

この日は伝馬町の伝左衛門宅に宿泊している。その際、彦根藩主より伊能忠敬と高橋善助（至時の次男後の渋川景祐）に金三百疋宛、坂部貞兵衛に金二百疋が贈られている。彦根藩は幕末の大老井伊直弼を輩出した譜代大名筆頭の家柄で、この時の藩主は直弼の実父である一三代直中だった。

夜は晴れていたため、妙法山蓮華寺（現彦根市中央町）の本堂前庭で天体観測を行つていて。ところで、伊能図では彦根城の北東部にかなり広い水面（湖）が描かれているが、現在の地図には見当たらない。『測量日記』を開いてみたが、そこにも名稱は無く、測量隊は琵琶湖

と測量し、米原宿に止宿している。後に入江内湖・松原内湖と呼ばれるこの二つの水面は、干拓が進められて今は陸地と化している。米原観光ボーダルサイ

ト「まいばらんど」による

彦根城には、二〇一七年十月十八日、京都への車旅行の途中で寄り道した。

表門橋を渡り、なだらかな階段を上がり、天秤櫓前の廊下橋の間をくぐり、天秤櫓から太鼓門を経て彦根城天守にたどり着いた。

天守内部は、階段が四五度前後で歩幅が狭く、上ることにかなり注意を要した（同じく、現存天守の丸岡城内部の階段でも同様の感想を持った）。

この時は予定外の訪問だったので、十分な時間を取りることができず、彦根城のみの見学だった。次回は、時間を作つて訪れ、城下町の雰囲気も味わいたいと思っている。

参考文献

- 彦根市ホームページ「彦根城城下町町名の変遷」
- 「旧広田家（納屋七）住宅」
- 彦根市観光ガイドホームページ「景観重要建造物」
- 「旧広田家住宅」



彦根城の石段



旧広田家住宅（彦根観光協会ホームページより）



廊下橋



天秤橋



大黒門塀



天守



玄宮園から見た天守と石垣

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十九回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

〔第八次測量〕
〔九州第一次〕
長崎→博多→小倉

自 文化10年8月19日 至 文化10年10月13日

監修 渡辺一郎
編著 井上辰男

編著 井上辰男

宿泊日・旧暦
(西暦)

宿泊地
現・市町村名

宿泊宅

特記・天体観測

大図番号

宿泊日・旧暦		(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
20	19-4					
(14)	小休	(13)	長崎町炉糟町	長崎村	同	長崎町炉糟町
同 長崎市	同 長崎市	同	同	同 長崎市	同 長崎市	同
禪宗大同庵	臨済宗河東山禪林寺	同	禪宗大同庵	同 長崎市	同 長崎市	同
辻。雨見合、 不 ^止 に付止宿へ引取。恒星測定	長崎逗留測。新大工町より木戸、上伊勢町、左 橋木戸、八幡町、右阿弥陀堂。左華表前、木戸、左 淨土宗天靈山竜渕寺、右伊勢町横町、阿弥陀 禪宗德恩寺、三辻、右横町八幡町、木戸、左 内、二ノ華表、諏訪大明神前四辻に繋終。此日 大村老侯より御使者土屋刺史之祐を以、先日曆 理実測御尋向の即答申上候御挨拶に御国産を被 下。左荒神社、同諏方社、裏門木戸、諏方境 寺、右横町馬町横町、左禪宗高林寺、右彦山修 驗本覚寺、止宿（即炉粕町）、禪宗大同庵測 所、左荒神社、同諏方社、裏門木戸、諏方境 又勝山道追分より炉粕町、左天台宗松岳山安善 寺、右横町馬町横町、左禪宗高林寺、右彦山修 驗本覚寺、止宿（即炉粕町）、禪宗大同庵測 所、左荒神社、同諏方社、裏門木戸、諏方境 又勝山道追分より左横町東上町通り四辻迄測 る。又四辻より下筑後町、上筑後町、左臨済宗 靈鷲庵、左一向宗觀善寺、左万寿山聖福禪寺、左 左普門庵、右正上庵、左禪宗碧光山永昌寺、左 西上町、四辻より左横町東上町通り四辻迄測 中町より西上町、左日蓮宗聖林山本蓮寺、三 辻。下筑後町、左真言宗聖無動寺、右の角は淨 土宗法泉寺、左臨済宗福濟禪寺門前、左真言宗 躰姓寺、左右横町、木戸、四辻。左東上町、右 下、左横町東中町、右横町（八百屋町、勝山 町）入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追 岩原屋敷、八百屋町、石橋、左立山御役所石垣 分を歴て勝山町に繋。	又三辻より、大黒町、左佐嘉屋敷、左肥後屋 敷、左右横町あり、右横町西中町。時津道入口 (長崎市中大黒町限)、御料所長崎村界。又西 中町より西上町、左日蓮宗聖林山本蓮寺、三 辻。下筑後町、左真言宗聖無動寺、右の角は淨 土宗法泉寺、左臨済宗福濟禪寺門前、左真言宗 躰姓寺、左右横町、木戸、四辻。左東上町、右 下、左横町東中町、右横町（八百屋町、勝山 町）入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追 岩原屋敷、八百屋町、石橋、左立山御役所石垣 分を歴て勝山町に繋。	又三辻より、大黒町、左佐嘉屋敷、左肥後屋 敷、左右横町あり、右横町西中町。時津道入口 (長崎市中大黒町限)、御料所長崎村界。又西 中町より西上町、左日蓮宗聖林山本蓮寺、三 辻。下筑後町、左真言宗聖無動寺、右の角は淨 土宗法泉寺、左臨済宗福濟禪寺門前、左真言宗 躰姓寺、左右横町、木戸、四辻。左東上町、右 下、左横町東中町、右横町（八百屋町、勝山 町）入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追 岩原屋敷、八百屋町、石橋、左立山御役所石垣 分を歴て勝山町に繋。	又三辻より、大黒町、左佐嘉屋敷、左肥後屋 敷、左右横町あり、右横町西中町。時津道入口 (長崎市中大黒町限)、御料所長崎村界。又西 中町より西上町、左日蓮宗聖林山本蓮寺、三 辻。下筑後町、左真言宗聖無動寺、右の角は淨 土宗法泉寺、左臨済宗福濟禪寺門前、左真言宗 躰姓寺、左右横町、木戸、四辻。左東上町、右 下、左横町東中町、右横町（八百屋町、勝山 町）入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追 岩原屋敷、八百屋町、石橋、左立山御役所石垣 分を歴て勝山町に繋。	又三辻より、大黒町、左佐嘉屋敷、左肥後屋 敷、左右横町あり、右横町西中町。時津道入口 (長崎市中大黒町限)、御料所長崎村界。又西 中町より西上町、左日蓮宗聖林山本蓮寺、三 辻。下筑後町、左真言宗聖無動寺、右の角は淨 土宗法泉寺、左臨済宗福濟禪寺門前、左真言宗 躰姓寺、左右横町、木戸、四辻。左東上町、右 下、左横町東中町、右横町（八百屋町、勝山 町）入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追 岩原屋敷、八百屋町、石橋、左立山御役所石垣 分を歴て勝山町に繋。	
二〇一	二〇一	二〇一	大図番号			

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
29	28	27	長崎町炉糟町	戸町村枝大浦	長崎逗留測。江戸町裏昨日打止より沿海順測、左俵物御藏、昆布藏、新地渡口石橋右柱に繋。此より新地へ渡を取、新地唐人荷物藏門前に印溝川尻、本竈町新地石橋手前に印を残。此より新地へ石橋を渡、門前を歴て新地唐物藏を右に繋して回る。右唐物藏番所前門前に繋、又門前に印繋(新地唐物藏一周測)。又石橋手前より石橋を残。又新地渡口石橋より沿海順測、銅庄跡、	二〇二
(23)	(22)	(21)	長崎市	同		
同	同	禅宗大同庵	東本願寺派法嶺山妙行寺			
同所逗留。地図並諸帳を調。恒星測定	定蔭網置。戸町村字女神崎、昨日打止より沿長崎逗留測。戸町村字女神崎、昨日打止より沿海測、クイ違(曲り崎)、此より先を長崎入江番所、小川尻、戸町崎、岩井浦、女神崎、女神島交代)、戸町村人家下(戸町浦)、左大村領御臺場、右女神島遠測、女神崎測遠轍に繋。沿海打止。それより乗船、帰宿。恒星測定	長崎逗留測。戸町村字女神崎、昨日打止より沿江奥を歴て山越横切向海辺、字小瀬戸浦へ出入口を残、又五枚ノ浦に入江奥より沿海、東崎、小瀬戸島へ瀬続満切印を残、右山に測、五枚ノ浦入江奥を歴て山越横切向海辺、字小瀬戸浦へ出入口を残。又香焼島渡口を歴て香焼島へ印を残。又香焼島渡口より蔭ノ尾島を測、西出崎、小瀬戸島一一周終。それより乗船、帰宿。恒星測定				
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
3						
(26)	伊能他四名 昼夜	土井ノ首村	長崎町炉糟町	(9.24) 同	(1813) 同所逗留。地図仕立。恒星測定	二〇一
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	長崎県長崎市	同	同所逗留。地図仕立。恒星測定	二〇一
恒星測定 伊能他四名 本陣武右衛門 権八 熊治郎	百姓清蔵	禪宗大同庵	禪宗大同庵	同	同所逗留。地図仕立。恒星測定	二〇一
恒星測定 伊能他四名 小嘉倉村字前原浜 枝中久保、字塩屋分、小嘉倉本村人家下を 歴て山ノ神島へ渡り一周測。又本村人家下よ り、枝柳ノ浦人家下や印を歴て向海へ横切印を 残、又ヤ印より千本松鼻を回、横切残印に繋、 土井ノ首村、鹿ノ尾川尻力印を歴て川尻片測。 又力印より土井ノ首本村、字網代人家下浜ア印 を歴て海へ横切、黒口浦へ出、又ア印より立石印 を残、谷印より押通シ鼻、鬼塚鼻、横切残印に 歴通シ鼻、クビレ谷印を歴て向海へ横切押 網代浦に打止終。五郎江島遠測。	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	同所逗留。阿蘭陀出島館並に象を見、唐館を見 る。	二〇一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
5	4					
(伊能他四名 28) 屋休共	永井他三名 昼休	(27)	深堀村			
深堀村	香焼島本村 (島村)		同 長崎市			
同 長崎市			同 長崎市			
本陣武右衛門 権八 熊治郎	百姓幸治兵衛			本陣武右衛門 権八館治郎		
島堀深屈屋敷、枝有海、呼崎にて沿海終。 島一周測。恒星測定	【伊能他四名】土井首村字崎網代より左山沿 海、サ印を歴て佐世婦島へ渡、一周測。サ印よ り坊ヶ崎、黒口ノ浦、横切残に繋、竿ノ浦村、 字江川、字居石、深堀村、字戸泊 (船藏あ り)、字亀ヶ崎人家前メ印を歴て向海横切、力 印を残、止宿にて昼休、メ印より堂ヶ崎を回、 横切残力印に繋、深堀本村字船津測所に至り、 島、上女島 (本名辯才) に深	島、中島遠測、御料所論島に付遠測、字広磯崎 高島を測、北鼻より右山測、小浜、石炭堀小家 五軒、中山浦を歴て絶頂遠見番所へ打上、又中 山浦より沿海測、金堀崎、広磯浦、左沖に羽 島、中島遠測、御料所論島に付遠測、字広磯崎 子島より下二子島遠測、御料所論島故遠測。大 篭村持横島測遠轍より西鼻瀬続片打、東鼻瀬続 片打測る。【門谷他三名】領蚊焼村属高島を 測。北鼻より手分、左山測、高島、宮崎鼻を回 て、広磯崎にて両手合測、鷹島一周終。蚊焼村 持飛島、野島、黒島、木ヶ島一周測。恒星測定				

8	7	6	宿泊日・旧暦
(10.1)	(30)	(29)	(西暦)
高浜村	同	深堀村	宿泊地
同 長崎市	同	同 長崎市	現・市町村名
古庄屋	同	本陣武右衛門 権八 熊治郎	宿泊宅
崎 綱 掛 岩 手 測 て 引 帰 て 蚊 焼 村 ・ 高 浜 村 字 黑 浜 、 左 八 武 者 明 神 社 、 綱 懸 深 堀 村 出 船 、 直 に 御 料 所 高 浜 村 界 に 至 る。 測 量 手 伝 人 、 村 役 も 不 出 に 付 、 高 浜 本 村 行 て 昼 休 し て 雀 島 ・ 高 浜 村 界 、 字 投 上 石 よ り 沿 海 逆 測 、 左 瀬 続 満 切 雀 島 元 を 歴 百 合 崎 (幟 に 繋) に て 順 逆 合 測	深 堀 村 逗 留 測 。手 分。 【門 谷 他 三 名】 深 堀 村 呼 崎 よ り 左 山 測 、 大 篭 村 、 鶴 瀬 崎 、 松 ヶ 崎 、 蚊 焼 村 、 天 神 崎 、 岡 山 鼻 、 百 合 崎 に て 順 逆 兩 手 合 測 。【永 井 他 三 名】 御 料 所 黒 瀬 村 ・ 蚊 焼 村 界 、 字 投 上 石 よ り 沿 海 逆 測 、 左 瀬 続 満 切 雀 島 元 を 歴 百 合 崎 (幟 に 繋) に て 順 逆 合 測	深 堀 村 逗 留 測 。手 分。 【門 谷 他 三 名】 深 堀 村 呼 崎 よ り 左 山 測 、 大 篭 村 、 鶴 瀬 崎 、 松 ヶ 崎 、 蚊 焼 村 、 天 神 崎 、 岡 山 鼻 、 百 合 崎 に て 順 逆 兩 手 合 測 。【永 井 他 三 名】 御 料 所 黒 瀬 村 ・ 蚊 焼 村 界 、 字 投 上 石 よ り 沿 海 逆 測 、 左 瀬 続 満 切 雀 島 元 を 歴 百 合 崎 (幟 に 繋) に て 順 逆 合 測	特記・天体観測
一一一	一一一	一一一	大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10	9					
永井他三名	(3) 昼休共	(2) 昼休共	永井他三名			
梶島	脇御崎村		野母村			
同 長崎市	同 長崎市		同 長崎市			
庄屋深堀代右衛門	良八 太郎 兵衛 本陣広次		本陣元庄屋岩永行助 (別当年寄村役) 一向宗海藏寺			
昨日沿海 逆測打止 サ印に繋終。 それより乗船。 らず山の上を測) 順測、野母崎を回(但海岸絶壁風波強、舟測な らへ打上、遠見番所にて山島を測。又ト印より、 所	定鼻に繋、 印に繋、 字伊賀見、 トイカケ浜に沿 海打止。恒 星測定	野母村出立。手分。 後浜(前浜より横切残)より左山沿海、脇御崎 村(俗曰脇津)、音瀬鼻、二本松鼻、脇津人家 前、字後浜を歴て裏海、字前浜へ横切を残、又 赤瀬浜より横尾崎を回て、字清四郎首、別手瀬 戸巾を取て残セ印に繋、それより横切力印に 繫、野母村、里ノ内、字新町、字前浜に繫終。 手分。【永井他三名】野母村入江口、字山下より沿 海打上、遠見番所にて山島を測。又ト印より、 所				
一一〇	一一〇		一一〇			

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
17	16	15	14	13
(10)	中飯	(9)	昼休	小休
長崎炉糟町	浦上村中里	長崎炉糟町	長崎村	日見村枝河内坂下郷 字日見峠
同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市	同 長崎市
禪宗大同庵	庄屋高谷重十郎	禪宗大同庵	庄屋森田貞六	百姓悦治郎
日々測量を届。 帰浦、帰宿。忠敬西ノ御役所に行 出立並長崎へ引	長崎返留測。長崎市中大黒町限より時津街道 測、長崎村、字船津、長崎市中（飛地）西中ノ 町、浦上村山里、馬込郷の内字西坂、字御船 藏、字町道、馬込郷、海辺より打上残に繋、右 に制札、右に山王宮、別当白岩山円福寺、字坂 本、石橋、字宿ノ坂、平野宿、里郷、字左城、 字柳道、中ノ川大橋、中ノ郷、字辻、字淨福、 字塔ノ尾、家ノ川、字家ノ郷、左西川添川向、 直に浦上村西、字井ノ上、字中原、字城ノ越、 字坂 引込松月庵あり、小川石橋、右一本松名高大木 あり、字新馬込、里郷字花見坂、字山王宿、字御船 本、石橋、字宿ノ坂、平野宿、里郷、字左城、 字柳道、中ノ川大橋、中ノ郷、字辻、字淨福、 字塔ノ尾、家ノ川、字家ノ郷、左西川添川向、 直に浦上村西、字井ノ上、字中原、字城ノ越、 字坂 帰浦、帰宿。忠敬西ノ御役所に行 出立並長崎へ引	日見駅測所より長崎街道、字西ノ下、枝河内 坂下郷、字岩間、字山口、字松尾、馬川、河内 坂下郷、字峠ノ下、字梨木坂、字岩谷、字日見 峠、長崎村枝河内郷字日見峠、字高野平、二 股川上、字御手水、字道幸、右谷間見渡放火山 の中腹に秋葉大権現社あり、字綱切、右大き なる宝筐塔有、右芭蕉塚あり（目にかかる雲や しばしの渡鳥）、一ノ瀬橋、枝中川郷字喰違、 右に八幡宮社、小川石橋、枝馬場郷限、長崎市 中新大工町入口木戸に繋終。	飯香浦名出立。茂木村枝大田尾名人家下より沿 海順測、字古賀浦、字鼻操崎、字大名迫、字小 崎、日見村枝網場、字番所崎、字網代浦、左天 満宮社、左淨土宗日見山養国寺、字中河原、日 見川尻を歴て小出鼻の御用杭に繋。又日見川尻 より長崎街道へ打上、字浜底、字鳥打場、長崎 街道へ出、矢上村・日見村境、御料所界杭へ 繋。此より長崎街道を測。字腹切坂（右に馬頭 観音あり）、日見本村、長崎街道駅日見宿、 見川石橋、測所前に打止。恒星測定	百姓久左衛門 本陣馬駅、伝兵衛 御用取次松尾五郎七 文藏

22 * (15)		21 * (14)	20 * (13)	19 * (12)	18 (11)	宿泊日・旧暦 (西暦) 小休	宿泊地 浦上北村枝平宗	現・市町村名 同 長崎市	宿泊宅 百姓茂一郎	特記・天体観測
下村		嬉野駅	同	彼杵駅	時津村	同	時津町	同	長崎市	同
同 嬉野市		佐賀県嬉野市	同	東彼杵町	同	本陣庄屋松尾七左衛門	福島屋茂一郎	百姓茂一郎	宿泊宅	同
百姓市兵衛		貴船社	本陣小筒屋喜兵衛 大村屋兵次郎	和泉屋源吾	本陣森又右衛門	和泉屋源吾	本陣庄屋松尾七左衛門	福島屋茂一郎	百姓茂一郎	同
刻崎矢、長谷川、長谷分、内田村枝西覚寺分、西山村、崎脇に打止終。此夜晴天、帰宿遅	道を測。三坂峠(郡界)、長谷分、嬉野村、枝浦河内、越木川板橋、枝尾上天	字小市場、市場川、塩田、武雄追分を歴て武雄	彼杵駅出立。彼杵村・丹生川村界より長崎街道測、丹生川村枝俵坂分、口留番所、牛ノ塔坂、平野川、不動山村枝原口分、枝平野分、枝尾ノ瀬川、字四郎丸、字二ノ瀬、字音牟田、字坂止。本村、字峠、彼杵郡彼杵村・藤津郡丹生川村界打	逗留測。彼杵駅より制札角(重測)、此より長崎街道を測。御茶屋測所前、一ノ瀬川、枝滝河内字松山、枝三根字上杉、枝樋口字谷口、二ノ瀬川、字四郎丸、字二ノ瀬、字音牟田、字坂止。本村、字峠、彼杵郡彼杵村・藤津郡丹生川村界打	大村信州老侯へ測量実測之儀を浜説。恒星測定	時津村出立。乗船、海上五里、彼杵駅着。此夜恒星測定	時津村字内坂、時津川、枝栗岩字野田、枝元村字丸田、枝元村、時津本村に繋。長崎より江戸書状届。恒星測定	長崎炉粕町出立。浦上北村より時津街道測、浦右の岩に六地蔵と釈迦阿弥陀観音を彫刻す、枝岩屋、左に岩屋大権現一ノ華表前、引込岩屋岳の禁に本社有、平宗川、枝平宗、字百合畑、時津村字内坂、時津川、枝栗岩字野田、枝元村字丸田、枝元村、時津本村に繋。長崎より江戸書	上北村、右に口留番所、字東、字西、字中通、浦	特記・天体観測
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	大図番号

24		23	22	宿泊日・旧暦 (西暦)	
(17)	小休	(16)	(15)	小休	小休
北方町	高橋村	武雄村湯町	西山村	永尾村枝西谷峰	鳥海村枝宿分
同 武雄市	同 武雄市	同 武雄市	同 武雄市	同 武雄市	同 有田町
庄兵衛 百姓庄七	平九郎	神宮屋恵左衛門 漆屋勇助	百姓郡右衛門	茶屋熊十	百姓九郎太
橋川、土橋、伊万野 街道追分制札左角御用杭に繋。	武雄湯町出立。河良村、長崎街道・唐津街道追分より長崎街道を測、枝閻魔堂分、高橋村、北方川	西山村村字測之尾峠より長崎本街道測、枝塔ノ原分、塔ノ原川、西山本村、皿山街道追分に繋、右田の中に薬師堂あり、左山上に觀音堂あり、枝龜屋分、左引込山王ノ社、枝力ンチヨク、枝下分、武雄村枝湯町分、左に一向宗善念寺、右に同宗円楽寺、明宗寺あり、富岡村、並村枝西浦分、河良村枝山ノ上分、枝石木、八並谷口分、枝森園分、井戸川、川上村本村、分、甘久川、枝甘木分、枝久保分、唐津街道追木、長崎本街道打止。此より唐津街道へ繋。野村枝原口分、右小山上に八幡ノ社あり、枝三牛中	西山村、左字皿山（陶器の土を取）、杵島郡立野河内村枝狩立分、枝宮上分、枝寺下分、左田川、枝平野分、三間坂村枝泉原分、左黒髮山参詣道あり、枝鶴原分、枝葭場分、鳥海村、鳥海川、枝宿分、永尾村、枝西谷峠、西山村枝西谷口分、本村人家入口、長崎街道へ出、追分に止皿山越横街道終。	岩谷河内村出立。外尾村、武雄道・伊万里道追分より武雄道を測、岩谷河内本村駅場、岩谷河内川渡、枝中野原分、左禪宗永昌庵、岩谷河内川、枝碑古場、枝赤絵町、右に十六善神社、右に法花宗法元寺、右に禪宗桂雲寺、枝本幸平分、枝白川分、右引込八幡宮、枝大樽分、枝幸平分、左一向宗西光寺、枝泉山分、左弁天社、本村より此迄町並（人家続て、家六百八十軒）、左字皿山（陶器の土を取）、杵島郡立野河内村枝狩立分、枝宮上分、枝寺下分、左田川、枝平野分、三間坂村枝泉原分、左黒髮山参詣道あり、枝鶴原分、枝葭場分、鳥海村、鳥海川、枝宿分、永尾村、枝西谷峠、西山村枝西谷口分、本村人家入口、長崎街道へ出、追分に止皿山越横街道終。	岩谷河内村出立。外尾村、武雄道・伊万里道追分より武雄道を測、岩谷河内本村駅場、岩谷河内川渡、枝中野原分、左禪宗永昌庵、岩谷河内川、枝碑古場、枝赤絵町、右に十六善神社、右に法花宗法元寺、右に禪宗桂雲寺、枝本幸平分、枝白川分、右引込八幡宮、枝大樽分、枝幸平分、左一向宗西光寺、枝泉山分、左弁天社、本村より此迄町並（人家続て、家六百八十軒）、左字皿山（陶器の土を取）、杵島郡立野河内村枝狩立分、枝宮上分、枝寺下分、左田川、枝平野分、三間坂村枝泉原分、左黒髮山参詣道あり、枝鶴原分、枝葭場分、鳥海村、鳥海川、枝宿分、永尾村、枝西谷峠、西山村枝西谷口分、本村人家入口、長崎街道へ出、追分に止皿山越横街道終。
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇

宿泊日・旧暦 【本隊】	(西暦) 宿泊地	現・市町村名 宿泊宅	特記・天体観測 大図番号
29 * — 22 曲渕村	28 * — 21 三ツ瀬山村	27 * — 20 西松瀬山村字三反田	26 * — 19 川上村
福岡県福岡市早良区	同 佐賀市	同 佐賀市	同 小城市
百姓伊三治 本陣庄屋重作 五三郎	本陣百姓要助 市右衛門	本陣酒屋勝十 酒屋郡藏	真言宗川上山賣相寺
星測定 替り、川を隔る。曲渕本村人家前に打止、止宿打上。恒郡飯	新村分、枝立峠（又三ツ瀬峠共）、國界まで測	川上村枝都渡木川端残杭より筑前街道三ツ瀬通測、下梅野山村字下田分、字広坂分、字井手野原分、梅野川土橋、西松瀬山村字三反田、測所に打止終。恒星測定	岡村小城町（正徳町）三辻より小城町（岡町、横町、中町、上町）、高原ヶ里村枝小物成分、小城川、岡本ヶ里村、織島ヶ里村、枝今市分、佐嘉郡今古賀村、江熊野村、戸田村、東山田村枝城徳分、芦苅川、枝立石分迄測る。此より駄市河原へ繋ぐ。平野村、北村、川上川舟渡、北村枝駄市河原に繋。又東山田村立石分より、川上村川上宿（川上神社二ノ華表左柱）迄測る。
一八七	一八七	一八八	一八八
9月25日 — 18 小城町鯖町	【支隊】昼夜 同 江北町	佐留志村 同 江北町	武兵衛 同 一九〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
30	(23)	片縄村	西隈村枝立花木	同 那珂川市		一八七
			同 那珂川市	百姓定吉	百姓新治	
			庄屋佐市			
文化10年10月 (1813)	【本隊】 1	薬院村枝出口	福岡県福岡市中央区	庄屋治右衛門	市瀬村より福岡道測、埋金村、四郎五郎川土橋、中ノ原川土橋、不入道村、古城跡猫峠城と云、山田村、左那珂川に添、川中に神功皇后築立の井手あり、右に伏見宮、右に竜の古城あり（安徳帝岩門、皇居の節、警固の武士置と云）、所村字治郎丸、字松尾、右川向、安徳村（旧跡安徳台と云。安徳帝の皇居と云伝）、右川向に安徳村鎮守風早大明神社、字冠石（山添にあり）、西隈村、枝立花木、後野村、道善村字堂木、枝恵子、片縄村枝熊添、枝内田、止宿入口に打止。	一八七
2	(10.24)	博多町	福岡市博多区	客屋の屋敷主大賀甚三郎 預主藤井清治	【本隊】 田本村人家前より、次郎丸村枝川原、有田村、原村、龜原村字逢坂、枝皿山（陶器を製）、龜原村内西新町（町並にて家数多）、通、博多町へ着。 【支隊】片縄村より福岡道を測、左十六三郎天神社、枝觀音堂、字妙見、老司村枝唐戸、野多目村、三宅村枝堂ノ原、左若八幡宮、枝矢台、右雜掌隈道、左古城跡（古野城と云）、塩原村枝潮煮塚、枝小森、野間村、高宮村、平尾村枝一本松、薬院村枝出口、上人橋、福岡市中、紺屋町、薬院町、城の外堀佐賀堀と云。薬院口、福岡城下にて恒星測定。それより博多呉服町着。	一八七
(一 25)						
同						
同						
同						
博多町逗留。江戸へ書状を出、長州へ測量先触を出。柳川南里格治へ宿送にて書籍を返す。						
一八七		一八七		一八七		

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
【後手】 【先手】 小休	東千手村内千手新町	同 嘉麻市	百姓善平	一分。下秋月村枝高内出立。【後手】下秋月村追分碑より枝高内八町越を測。直に八町越峠、大力川石橋、先手の初に繋、東千手村内千手新町昼休。【先手】嘉麻郡大力村、大力川石橋より、大橋、字紫原、東千手村字原、枝千手新町駅場、千手川石橋、右に一向宗宝林山西樂寺、千手川土橋、(右計引込禪宗知福山千手寺あり)、字鳥越峠、枝芥田、芥川、西郷村、字煮土峠、嘉麻川渡中央界、大隈町駅場、左に字煮土峠、嘉麻川渡中央界、大隈町駅場、左に制札、左引込、鎮守祇園社、止宿前にて打止。
(2) 香春町	【先手】 昼夜 後藤寺村	【後手】 昼夜 猪膝町	(11. 1) 大隈町	百姓新治郎
同 香春町	同 田川市	同 嘉麻市	同 嘉麻市	
本陣米屋源右衛門 博多屋勘助	武兵衛	本陣大庄屋猪膝平四郎	本陣酒屋喜左衛門 大屋儀作 豊前屋長助	
恒星測定	【先手】 猪膝町(駅場)より初、左に一向宗巖寺、石橋、右中津道追分、左天満宮の社、枝小園、金国村、糸村枝新所、糸川渡、字三ヶ瀬、池尻村、三ヶ瀬川土橋、枝盛安、後藤寺村、左蛭子宮、宮尾村、左上野道追分、枝平松、小川土橋、岩峠、上伊田村枝新町、左恵美須社、伊田川仮橋、(川上彦山縁川也)。川下は筑前遠賀川。此より川下金田村迄、芦屋より船通行)、左山根に弁城村岩窟二ヶ所、下伊田村枝鉄砲町、鉄砲坂、新所村枝浦野、新所川、左香春村、香春川、左上野通筑前追分あり、枝新町迄測る。此より香春の神社へ打上、一の華表、二の華表、神前迄測る(但香春岳の内の岳の裾に在)。神殿の後なる一ノ岳、保元年中より鬼ヶ岳と号す、古城跡なり。又枝新町迄測。香春町、左一向宗善竜寺、左に問屋場、左の華表、一向宗淨妙寺、左に山伏千手院、左淨土宗光願寺、止宿測所前打止。小倉侯より国産を被贈。	大隈町出立。【後手】同所より、下益村、力毛峠、池尻村、三ヶ瀬川土橋、枝盛安、後藤寺村、左蛭子宮、宮尾村、左上野道追分、枝平松、小川土橋、岩峠、上伊田村枝新町、左恵美須社、伊田川仮橋、(川上彦山縁川也)。川下は筑前遠賀川。此より川下金田村迄、芦屋より船通行)、左山根に弁城村岩窟二ヶ所、下伊田村枝鉄砲町、鉄砲坂、新所村枝浦野、新所川、左香春村、香春川、左上野通筑前追分あり、枝新町迄測る。此より香春の神社へ打上、一の華表、二の華表、神前迄測る(但香春岳の内の岳の裾に在)。神殿の後なる一ノ岳、保元年中より鬼ヶ岳と号す、古城跡なり。又枝新町迄測。香春町、左一向宗善竜寺、左に問屋場、左の華表、一向宗淨妙寺、左に山伏千手院、左淨土宗光願寺、止宿測所前打止。小倉侯より国産を被贈。	恒星測定	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
13	12	11			
~ 5	~ 4	(3)	先手昼夜休 徳力村	後手昼夜休 呼野村	
同	同	小倉城下	同 北九州市小倉南区	同 北九州市小倉南区	同 北九州市小倉南区
同	同	同 北九州市小倉北区	同 北九州市小倉南区	庄屋勘左衛門 本陣原幸右衛門	本陣原幸右衛門
同	同	本陣宮崎良助			
付 大風。 無據逗留。	山本源助、 石橋、 小森村、 市丸村、 枝原、 木下村、 枝西、 新道寺村、 枝山ヶ坂、 石原町村、 高津尾村、 枝盲谷、 新徳光村、 加用橋、 枝古川、 徳力村、 駅場、 枝植松、 北方村、 枝新理、 枝紺屋ヶ原、 守恒村、 枝新町、 右へ曲は大里道追分、 城野村、 新村、 恒星方村、 枝新測定、 碑に繋、 九州測量済。 それより無測、 表へ書状を出す。 差出帳の内を国図と共に江戸届を頼遣す。江戸々 追分碑に繋、 九州測量済。 それより無測、 表へ書状を出す。 差出帳の内を国図と共に江戸届を頼遣す。江戸々	【先手】企救郡呼野村駅場より初、左に制札、 石橋、小森村、市丸村、枝原、木下村、枝西、新 道寺村、枝山ヶ坂、石原町村、高津尾村、枝盲谷、 新徳光村、加用橋、枝古川、徳力村、駅場、 枝植松、北方村、枝新理、枝紺屋ヶ原、守恒村、 枝新町、右へ曲は大里道追分、城野村、新村、 恒星方村、枝新測定、碑に繋、九州測量済。 それより無測、表へ書状を出す。 差出帳の内を国図と共に江戸届を頼遣す。江戸々 追分碑に繋、九州測量済。 それより無測、表へ書状を出す。 差出帳の内を国図と共に江戸届を頼遣す。江戸々	香春町出立。手分。 下香春村、左に香春神社旅所あり、枝殿 町、枝高座石寺谷、鏡山村、此居村往来より引 込、鏡山神社の森あり。それより又東に、はゝ き原とて小松原あり、其所に古墳あり、河内王 の墓と云伝。万葉集に河内王葬豐前国鏡山歌あ り、枝瀬戸、下採銅所村、枝大熊、採銅所町駅 場、上採銅所村、左に古宮八幡社、枝天屋金辺 峠、企救郡呼野村(駅場)、本陣原幸右衛門 前、先手の初に繋。	一七八 一七八 一七八 一七八 一七八 一七八	一七八
一七八	一七八	一七八			大図番号

イザベラ・バードが携行した日本地図についての考察

はじめに

明治維新（1867年）から間もない明治11（1878）年に来日したイギリス人女性探検家イザベラ・バードが携行した日本地図は、来日する2年前の明治9（1876）年にリチャード・ヘンリー・ブラントン（R・H・ブラントン）が編集作成し、英國トリブュナー社から発行された地図である。イザベラ・バードはこの地図が大変役立つたと旅行記で述べている。

明治初期は江戸時代の長かった鎖国政策も終わり新政府による開国政策の下、欧米先進諸国の制度文化を急速に導入し始めた時期である。近代測量にもとづく地図は、日本国内では明治維新直前の慶応3（1867）年に伊能忠敬の地図を元図にした「官板実測日本地図」の刊行などを除けば一般向けに多く発行されるのは明治中期頃からになる。イギリスではその頃すでに遠い東洋の国日本の地図が刊行され、一般の人が旅行等実用に使用していたことに驚き、加えてこのイギリス人の日本地図が一見して伊能忠敬の地図（以下伊能図」と呼称）に類似しているのに大変びっくりしたことが、この小文を書く契機となつた。

私はR・H・プラントン作成のこの日本地図は主として伊能図を元図に他の地図情報（特に内陸部等の）を加えて作成したと推定するものだが、プラントンの地図について論究したものが少なく更に調査検討を要すると考える。しかし、このよ

石川
青一

1 バードとブラントンのプロフィール

(1) 地図の携行者 「イザベラ・バード」 プロフィール
・イギリス人。ヨークシャー・バラブリッジ生。
1831～1904年。72歳没。



イザベラ・バード 金沢正脩『イザベラ・バード 「日本奥地紀行」を歩く』より

うな日本地図が、日本国内で一般向けに刊行される前の中明治初期にすでに発行されていたことは、伊能図が実測による正確な地図であると評価されていたことを示す貴重な事実であると思う。

1 バードとプラントンのプロフィール

(1) 地図の携行者「イザベラ・バード」プロフィール

なお、この奥地旅行は、金坂清則「イザベラ・バード鋭い觀察力で日本の実相を記録した希代の旅行家」（公益財団法人ニッポンドットコムの多言語ウェブサイトより）によれば、英國駐日公使バーカスの要請、「外国人内地旅行免状」取得等や、各種の準備、現地への手配など、周到に用意された旅だったといわれる。



イザベラ・バードの日本旅行ルート図 金沢正脩『イザベラ・バード「日本奥地紀行」を歩く』より

(2) 地図の作成者「R・H・ブラントン」プロフィイ
ル

イギリス人。スコットランド生まれ。1841
～1901（60歳没）。灯台建設・築港技師。来日

時期2回。来日通算7年間ほど。

當時 27 歲。約 4 年間滯在。

約3年間滯在。



R・H・ブラントン 横浜開港資料館編「R. H. ブラントン-日本の灯台と横浜のまちづくりの父」より

2 伊能図との比較

先ず上の両地図を比較する。両図を見て大変類似している印象を受ける。(小サイズの画像では比較は難しいが)

A、伊能忠敬「大日本沿海輿地全図」伊能小図
伊能忠敬により、足かけ17年の歳月をか

10次に及ぶ全国実地測量で作成され、大図214枚、中図8枚、小図3枚が成る（小図は3枚で日本全土を表す）。文政4（1821）年に完成し幕府に上呈された。本年は完成後200年になる記念すべき年である。

B、R・H・ブランドンの「日本大地図」の概要

- も貢献したことで「日本の灯台・横浜のまちづくりの父」といわれている。

 - ・来日の経緯等
 - ①日本政府が近代的灯台建設のため、英國に技術者の派遣を要請し、英國政府が人材を選定した結果 R・H・ブラントンが選ばれ派遣された。
 - ②主な役目は灯台を築造し、運営を指導することであつたが、副次的に開港地の外国人居留地の道路修造等に尽力することになった。
 - ③来日中には明治天皇に拝謁（明治4年11月）や、木戸孝允、佐野常民等明治新政府の要人とも交流があつた。
 - ・その他

R・H・ブラントンの指導で、明治初期に建設され、現在も使用され続けている大吠埼灯台（千

B、R・H・ブラントンの「日本大地図」の概要

76

・イザベラ・バードが携行した日本地図

・タイトル NIPPON (JAPAN) 18

 - ・編集者 R・H・ブラントン（英國人。灯台建設・築港技師）
 - ・出版社 トリブユナー社（英國）
 - ・出版年 1876（明治9）年
 - ・大きさ 日本を2分割し、更に4枚にしたものの。4枚を張り合わせると縦151cm、横16cm。広げると日本全図になる
 - ・縮尺 126万7000分の1
 - ・その他 カラー印刷
 - ・同種の地図が横浜開港資料館に収蔵

3 伊能図を源流（元図）に作成したと考える理由

(1) 地図の編集・作成者の R·H·ブラントンは、明治初期に日本政府の招請により英國から派遣され、日本の近代的灯台の建設・運営・指導のため来日した技師であり、日本文化にも関心が高く、明治元（1868）年から通算7年間に及ぶ日本滞在中に当時日本国内で流布された各種の地図について見聞、蒐集や多くの地図関係情報に接する機会があつたと考えられる。又、ブラントンは明治政府高官（木戸孝允、佐野常民等）との交流もあり、望めば一般人以上に情報を得られる立場にあつた。

(2) R·H·ブラントン作成の「NIPPON (JAPAN) 1876」の地図中央部にも、日本にあつた地図を参考にしたと記されているが、ブラントンは灯台建設の技師であり、職業に必須の三角測量技術などについて豊富な知識・経験を有していた。

日本では当時江戸時代から広く庶民に流通し実用性も高かつた長久保赤水の日本図（以下赤水図と呼称）など各種の地図があつたが、実測による地図は伊能忠敬の地図（伊能図）のみであつたことを考えると、ブラントンは主として伊能図を参考にして作成したと考へるのが自然ではないだろうか。

(3) R・H・ブラントンは来日する前の或る時期に、幕府が1861年にイギリス海軍に提供した伊能図を見る機会があり、伊能忠敬の存在と伊能図について知見を持つていたことも考へられる

イギリスには、幕末の文久元（1861）年
港湾測量の目的で江戸湾に来港したワード艦長
率いるイギリス艦隊が幕府から提供を受け持ち

3 伊能図を源流（元図）に作成したと考える理由

同種の地図が横浜開港資料館に收藏



「日本大地図」NIPPON (JAPAN)
R・H・プラントン 1876(明治9)年
金沢正脩『イザベラ・バード「日本奥地紀行」を歩く』より



「大日本沿海奥地全図」(伊能小図)
伊能忠敬 1821(文政4)年東京国立博物館所蔵

帰った伊能図写があり(グリニッヂの国立海事博物館収蔵)、更にイギリスはこの伊能図をもとにして3年後の1863年に大改訂した日本周辺地図を発行している。(改訂した地図の中の中央部には、「日本政府の提供した地図(幕府が提供した伊能図の意)に英国が蓄積した地図情報を加えて作成した」と記されている。)プラントンはこれらの地図を見る機会があったかも知れない。(あくまで推定)

プラントンの著書の中に、伊能忠敬とその地図(伊能図)について、強い関心を持つていたことがうかがえる注目すべき記述があるので、以下に抜粋する。

1869年(明治2年)4月、外国官判事寺島(宗則)は日本帝国全土の測量の可能性について、私の意見を訊ねた。外固と条約を結んだ當時、既にこの国にはかなり正確な地図があつたのに、この相談は不審でどのように判断してよいか私は迷つた。日本に既にある地図はスケールが余りに小さく、したがつて細部に欠ける所があるが、それでも河川の流れや山の輪郭や都市の所在地はかなり正確に記載されてあつた。事実、海岸線の表示は非常に正確であつたから、この地図はイギリス海軍省に海図として採用され、これを頼りにして艦船は航海したのである。

この地図は科学の原則とヨーロッパ諸国現用の方法に基づいて、日本全図の作成に利用できると私は思えたので、私はしばしば報告書に引用した。日本を辞去する前の私の仕事の一つは日本の地図の資料を利用して縮尺1インチ(約2.54センチメートル)20マイル(約32キロメートル)の地図を作成する事であった。それによって町や村や河川、山岳、道路などを現在のものよりずっと大きく表示できた。

通訳の助けをかりて日本語で表示された名称はローマ字綴に直した。ローマ字の表示法は、当世界中で日本学の第一人者と目されていたイギリス公使館の書記官E・サトウ氏の推薦する綴字法(ていじほう)によつた。この地図は発行後、標準日本地図とみられ、欧米の各国政府の各部局や日本と貿易する商社などに広く購買された。日本内陸を旅行する者もこの地図の価値を認めめた。

ミス・バードは彼女の著書『日本の未開発の地方(Unbeaten tracks in Japan)』の中で、この地図はよき案内書であったが、ときには失望したこと

もあった、と書いている。

200年以上にわたって長崎の出島に居住したオランダ商人や、彼らに付随した科学者は、ヨーロッパの最も洗練された言葉を通じて日本人の科学的思考力を豊かにした。これらオランダ人の（直接ではないが）弟子にピカール（フランス人数学者）、日本のイノ・チュケイ（伊能忠敬）がいた。彼が地図作成の技術に秀でていたことは、彼の名を冠して呼ばれている日本最初の地図に表れている。

※（R・H・ブラントン著・徳力真太郎訳『お雇い外人の見た近代日本』「十九 地図、測量及び技術者の養成」より抜粋。講談社学術文庫1986年）

(5)結論
R・H・ブラントンがイギリスに帰国後、1876（明治9）年に作成・刊行した日本地図「NIPPON (JAPAN)」（来日したイギリス人女性探検家イザベラ・バードが携行した地図）は、彼の著書の記述から彼の灯台建設、築港技師としての職業上必須である正確な測量技術の必要性への理解が高いことや、伊能忠敬とその地図に強い関心を持っていたことがうかがえる等を総合的に考えた場合、R・H・ブラントンは当時日本で唯一実測により作成された伊能忠敬の地図（伊能図）を源流（元図）にして彼の地図を作成したと考えるのが自然ではないだろうか。改めて私の手許にあるR・H・ブラントン、伊能忠敬、両地図を比べると、小型版で細かな比較が難しく更に検討の必要はあるが、きわめて類似している印象を強くする。

4 明治期に入り近代的日本地図を一般国民が入手出来るようになった時期について

(1)江戸時代には石川流宣の日本図や道中案内図などいくつかの日本図が作られ一般に利用されたが、中でも安永8（1779）年に長久保赤水が作成した改正日本輿地路程全図（赤水図）は何度も改訂が行われ一般庶民に利用された。明治に入つても広く流布され、又ヨーロッパにも伝わった。

赤水図から42年後に伊能忠敬により作成された我国初めての実測による「大日本沿海輿地全図」（伊能図）が文政4（1821）年に幕府に上呈されたが、その利用は幕府関係機関に止まり、一般国民の利用に供されることはなかつた。又外国にも知られていたが一般国民にその存在が知られ、利用されるようになるのは後述のように明治維新後からであり、明治維新直前の慶應3（1867）年に幕府開成所から伊能図を元図に「官板実測日本地図」が発行されたのは注目すべき第一歩であった。

(2)明治政府により先進欧米各国の諸制度の導入近代化政策が推進され、地図についても西欧の測量技術に基づく近代地図の製作が進められる中で、前記「官板実測日本地図」や、文部省、内務省、陸地測量部などから伊能図を元図に作成した日本地図が多く刊行されるようになつた。

（参考資料）

(2)このような状況から考えると、広く一般国民に近代的日本地図が入手出来るようになる時期は、諸説あるも文部省の小学校教科書にも載つた明治10（1877）年頃以降と考へる。（参考資料）

この頃すでに英國では遠く離れた東洋の国の日本地図が発行され、一般の実用に使われていた。

おわりに

私が30歳から40歳頃、勤務先の転勤で青森県や山形県に各3年ほど勤務した折、地元のTV・新聞等にイザベラ・バードのことが時々報じられ多少知る機会があつた。長かった江戸時代が終わり、明治に代わつてまだ間もない明治11年、世の中はちよんまげや着物姿の人も多かつた頃に、風俗習慣も異なる未知の国、日本の更に外国人未踏の地である東北、新潟、北海道（蝦夷地）を英国人女性探検家が従者一人を連れて旅行したことに大変驚いたことを覚えている。

その頃は高度成長時代で、私も仕事に追われるサラリーマン生活を送つていたこともあり、それ以上の関心を持たなかつた。改めてイザベラ・バードに関心を持ったのは、3年程前に偶然、金沢正脩著『イザベラ・バード日本奥地紀行を歩く』を読んでからで、その中に旅行で携行したという英國で発行された日本地図が載つており、一見して伊能忠敬の地図に大変似ていることだつた。たまたま今年は春頃から新型コロナウイルス感染症予防のため、月に4～5回あつた定期的な各種の会合が極端に減り、現在一つを除きすべて中止になり単調な巣ごもり生活を余儀なくされている中で、ふとイザベラ・バードが携行した日本地図について少しまとめてみようと書いてみた。調査不足等あるが、一読頂ければ幸いである。

（参考資料）伊能図をもとにした幕末・明治の地図

を参考にして作成している。(陸地測量部による正式な日本地図の測量開始は明治の中期となる)

(1)官板実測日本地図

慶応3(1867)年に徳川幕府開成所から木版製で刊行。明治3(1870)年に同じ版木を用いて開成所の後身、大学南校から再版。文政4(1821)年版伊能小図をもとに、そのほかの資料を加えて刊行。

(2)大日本地図

明治4(1871)年、川上寛作(信州松代藩出身開成所、大学南校、文部省勤務)

伊能図をもとに刊行された地図で、官板実測日本地図や伊能図の空白部分などを他の資料によつて補い、近代地図にまとめた最初の地図。官板実測日本地図の姉妹図といえる。

(3)小学必携日本全図

明治10(1877)年、高橋不二雄作(内務省地理局員)伊能図より編修された小学生向けの日本地図。縦99cm、横94cm

(4)輿製20万分の1図

明治17(1884)年、陸地測量部製作。伊能中図をもとに他の資料で補訂して一般向けに発行された地図。

(4)大日本全国

明治10(1877)年陸軍参謀局製作伊能図を参考にして作られたと考えられている。

(5)大日本国全図

明治13(1880)年、内務省地理局製作。伊能図に基づいて作成したと明記されている。

伊能忠敬研究会編集『忠敬と伊能図』1998年発行、アワ・プランニング社から

【参考文献】

○図録「鎖国時代・海を渡った日本図」

小林茂ほか編 大阪大学出版会2019年

○「シーボルトが日本で集めた地図」雑誌『地理』付録古今書院 2016年

○「イザベラ・バード『日本奥地紀行』を歩く」金沢正脩著 JTBパブリッシング 2009年

○『イザベラ・バードの日本紀行』(上・下)イザベラ・バード著 講談社学術文庫 2008年

○『イザベラ・バードと日本の旅』金坂清則著 平凡社 2014年

○ツイン・タイム・トラベル「イザベラ・バードの旅の世界」金坂清則著 平凡社 2014年

○『お雇い外人の見た近代日本』R・H・ブラントン著徳力真太郎訳 講談社学術文庫 1986年

○『伊能測量隊まかり通る』渡辺一郎著 NTT出版 1997年

○『イザベラ・バード旅の生涯』0・チャックランド著川勝貴美訳 日本経済評論社 1995年

○『図説・伊能忠敬の地図をよむ』渡辺一郎著 河出書房新社 2000年

○日本史リブレット人『伊能忠敬』星埜由尚著 山川出版社 2010年

○『忠敬と伊能図』伊能忠敬研究会編アワ・プランニング 1998年

○『地図中心』一般財団法人日本地図センター 2018年10月号 通巻553号

○『R・H・ブラントン・日本の灯台と横浜のまちづくりの父』横浜開港資料館編 横浜開港資料普及協会 1991年

伊能図完成200年を特集した雑誌

男の隠れ家
ベストシリーズ
2021年

11月28日発行

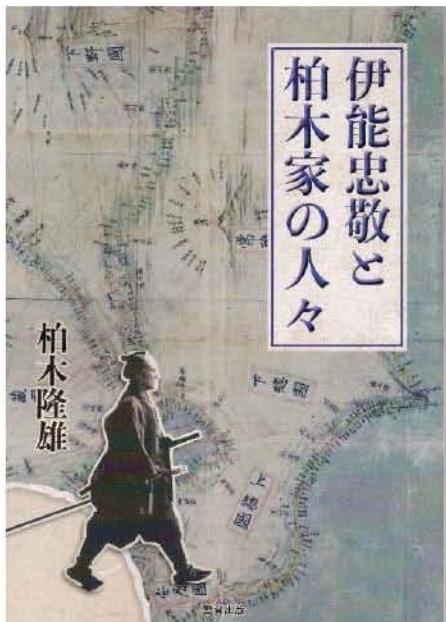


【書籍紹介】

柏木隆雄著『伊能忠敬と柏木家の人々』

星埜 由尚

伊能忠敬研究会の古くからの会員である柏木隆雄さんがこれまで蓄積されてこられた伊能家と柏木家に関するさまざまな資料をまとめられ、表題の書を上梓された。ご存知のように柏木隆雄さんは、伊能家から分かれ、伊能家の番頭としておそらく陰となり日向となつて忠敬を支えた柏木幸七の子孫に当たる方である。表題の書の著者としては、これ以上の方はおられないであろう。



本書の第1章から第3章まで、伊能家と柏木家との関わり、柏木家に残された古文書などの伊能忠敬関係資料について述べられている。特に、伊能忠敬が婿入りした伊能家の跡取り娘「達」が亡くなつた後、内妻として忠敬に尽くした法名「妙諦」について、柏木幸七の娘であり、次男秀藏と三女琴を残したことについて詳しく記しておられる。



梶よう子著『藤岡屋由蔵「噂を売る男」』

秀蔵は、伊能測量隊の一員として第6次測量まで主要な隊員であった。後に忠敬から勘当されてしまい、伊能測量に貢献したにもかかわらず、不遇であつたが、数学に優れた才能を持ち、晩年は、算術などを教えていた。秀蔵が詠んだ歌からその雅心を感じ取られ、庶子であったがゆえの境遇に、不憫を感じられていることが文章から伝わってくる。琴女についても、その御子孫の方との奇遇の縁なども記され、柏木家の誇りといったものが随所に感じられる。

柏木家に残された古文書などについては、柏木家の先祖書、シーボルト事件関係の古文書や近藤重蔵の「長崎之圖」、忠敬が持ち帰ったとされる「法隆寺繪図」などのが紹介されている。絵図の来歴などについての法隆寺との遺り取りも紹介され、熱心な柏木隆雄さんの面目躍如たるところである。その他、慶長十三年の江戸図、司馬江漢の「地球全図略説」などについての紹介もある。

第4章は、柏木隆雄さんがこれまでに「伊能忠敬研究」などに書かれた随筆が掲載され、故佐藤嘉尚氏が作成された忠敬の年表が掲載されている。そして最後の第5章は、「伊能忠敬研究」に発表された小説「林蔵と秀蔵」で締め括られている。

以上のように、柏木家と忠敬との繋がりを中心には、柏木家に残された史料・古地図を紹介し、特に、内妻妙諦の係累が語られ、特に秀蔵に対する柏木隆雄さんの思い入れが感じられる一冊である。この書は、限定出版であるので、購入希望の方は、著者の柏木隆雄さんに直接申し込んで頂きたいとのことです。

星埜 由尚

星埜 由尚

最近読みましたが、忠敬さんファンにとつて頭を休めることができる本と思いましたのでご紹介いたします。

シーボルト事件を題材にした歴史ミステリー小説で、情報屋の先駆け由蔵の周辺に起ころるチヨット物悲しく、ほろ苦く、奇想天外ドキッとする展開に心が弾み一気に読み進みたい内容です。

大沼 晃



四六判 336頁 価格1980円（税込）
2021年7月28日 PHP研究所 発行

近世佐原伊能家の記録「伝家」

玉造功

このたび千葉県香取市の佐原古文書学習会では表題の史料集を刊行した。『伝家』は、題簽の後半が失われた文書で、家譜などと共に伊能家の当主において所蔵されたものである。

忠敬の妻ミチの祖父にあたる伊能景利は近世初

頭から享保十（一七二五）年までの佐原村の村政記録『部冊帳』（佐原市史資料編）として公刊）を残した。『伝家』は十四年後の元文四（一七三九）年に利根川中下流域の新田開発のために勘定奉行所の役人一行が佐原村に到着した際の対応の記録から始まる。同年中に佐原村は旗本四家の知行地から幕府直轄領に支配替えとなり、安永六（一七七七）年には六千石の旗本津田氏の知行所となつた。『伝家』は忠敬が隠居する前年の寛政五年の記事で終わる。記録された内容は、佐原村の村政記録が中心であるが、伊能家の家政記録が含まれており興味深い記事も多い。

『伝家』の解説は二〇一六年五月から二〇二〇年二月までの四六回の月例会で読了した。この頃から、月例会で輪読した結果をワードや一太郎でデジタルデータとして記録するようにしてきた。その蓄積を研究資源として後世に残すため今回刊行に至つた。

佐原古文書学習会は一九七四年に発足し四十七周年を迎えた。発足以来、会を主導した故小島一仁氏は伊能忠敬研究会の初期のメンバーとして会報に健筆を振るわれた。また対象とする文書も伊能家文書とそれ以外の佐原村の古文書の二本立てで解読してきた。そのようなこともあって、古文書学習会の十八人のメンバーの中には伊能忠敬研



佐原古文書学習会

近世佐原伊能家の記録「伝家」

—忠敬前後の家と地城の諸相—

各解説史料には佐原古文書学習会代表の酒井右二氏による「大意と解説」を付して理解の一助とした。

下に示したのは史料と「大意と解説」の一例である。また会員有志による解説として「本史料を理解するために」を載せた。これは解説作業の中で各会員が関心を持ったテーマについて調査研究したものである。各タイトルは次の通りである。

・伊能家と永澤家 伊能楯雄・酒井右二
・江戸時代の堤防工事 —御普請と自普請—

・水と向き合う下利根川流域の暮し 小西則子
・伊能三郎右衛門家の女性たち

—タミとイシ、そしてリヨ— 玉造功

・足尾銅山貸付金と佐原村の領主旗本津田氏 塚原芳久

・佐原村関係地図について 及川敏男

究会会員・元会員の伊能楯雄、及川敏男、玉造功、成家淑子、本郷靖枝の五名が加わっている。

寛政四子年一月十四日 殿様より被下置候御墨付之写

一、三人扶持 覚

右者多年村方取扱り

其上勝手用向茂骨折

出情候ニ付宛行之者也

寛政四子年

二月十四日

出情

二月十四日

出情

一、三人扶持 覚
右者多年村方取扱り
其上勝手用向茂骨折
出情候ニ付宛行之者也
寛政四子年

（大意と解説）

「伝家」の末尾は、寛政四年、前述した伊能忠敬と永澤俊順へ三人扶持が与えられた辞令の写しである。このことを特に重要視して末尾に配置しているとみられるが、時系列では、寛政五年三月の旅立ちの記述で終了している。旅行から帰つて、翌年末に忠敬の隠居が領主旗本から正式に認可される。けれども、伊能家内部での実質的な代替わりは、この時点であつたことが想定される。「伝家」は忠敬が当主であつた時期と、その前代の当主が不安定な時期の記録である。婿入りした忠敬が、当家の運営のために必要とされたそれまでの前掲的な情報や事柄、また、当主となつた後の忠敬自身の事績を記録して、後代のために残したことになるのであろう。

入手方法

残部寡少ですが、左記までメールまたは葉書にて申し込んでください。

連絡先 代表 酒井右二

（e-mail）migi1950@yb.ne.jp

住所 〒287-0003
香取市佐原13385
電話 0478-54-5674
代金 送料込2000円

各地のニュース

石川県支部だより

伊能忠敬 加能越を測る —石川・富山 足跡探訪—

河崎 倫代

「伊能図完成1100年」にあたる

二〇二一年の年の瀬に、石川県支部では『伊能忠敬 加能越を測る』(A4判126頁)を自費出版した。



—石川・富山 足跡探訪—

宿所・休所となつた家を探した。宿所は天文測量の地だったからだ。伊能隊には申し訳ないが、私たちは全行程を車(一部、船)で移動した。探訪の詳細は会報に「加賀藩測量の足跡をたどる」というタイトルで連載したので、記憶している方もいらっしゃるかと思う。

昨年一月、ようやく冊子化の作業に入った。会報記事の市町ごと再構成を寺口学・室山孝両会員と河崎で分担執筆、内容の詳細な検討・手直し、絵図・史料の再探索を室山会員と河崎が担当、史料編『伊能忠敬測量日記』(加能越関係)の翻刻等を室山会員が一手に担当された。伊能大図と国土地理院地図の対比、休・宿所等の地図への記載、本文・写真・絵図等の複雑な割付作業は寺口会員がすべて担当した。お二人には大変な作業を黙々とやつていただき、感謝である。

こうしてようやく日の目を見た本書を、当初の目的を果たすべく、石川・富山両県の公立図書館に寄贈することができた。できるだけ多くの人が本書を手にして、教科書で学んだ歴史上の偉人が郷土の地を実測し、先祖がその作業をサポートしたことに対する関心と理解を深める機会となつてくれれば嬉しい。特に、学校の先生方が本書を授業に取り入れてい

ただければ、児童・生徒たちは身近な歴史としての伊能測量を実感できるのではないかだろうか。それを願つて本書を思い立つたと言つても過言ではない。

なお、残部は1500円で希望者

川・富山両県の地域限定版であることをご承知おきください。

*問い合わせ先

伊能忠敬研究会石川県支部
電話 ○七六一-六八一五七二五
Eメール ishikawa@inoh-ken.org

目次

*はじめに・目次・凡例

*伊能忠敬の実像を求めて
伊能忠敬の測量方法

*加賀・能登・越中測量のあらまし

*伊能忠敬測量隊のあしどりをたどる

*【石川県域】

*伊能忠敬とふるさとの人々

*西村太冲・石黒信由
コラム

*加賀藩ゆかりの「沿海小図」
*城端天文学の紹介

*伊能図完成二百年展
*金沢海みらい図書館で開催

*伊能中図と『伊能図大全』

*伊能忠敬と測量関係略年表
*史料編

*あとがき
伊能忠敬測量日記



石川県志賀町のページ

伊能中図 (NISSHA 所蔵) と地理院地図を対比させて、地理院地図には休・宿所の位置・月日を記載した。

に頒布する予定であるが、内容が石

石川県能登町で伊能図 上呈一百年記念の企画展

石川県支部 寺口 学

伊能図の幕府上呈二百年を迎えた二〇二一年十一月、石川県能登町の柳田星の観察館「満天星」で、企画展示「～伊能図完成二百年記念～ What's this? It's 能登半島！」江戸時代に描かれた絵図・地図に見る能登～」を開催しました。「満天星」は、望遠鏡とプラネタリウムを備えた天文学の学習施設です。伊能測量隊が全国測量の中で、天文測量を実施していたこと、忠敬が地球の大きさを知ろうとしたがために、測量の旅を始めたことになつたことなど、天文学との深い関わりをもつことから、本施設での企画となりました。

展示品は三つに分けられ、最初に日本地図の歴史をたどるパネルと、江戸時代に流通した赤水図系統の原図（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）を展示。続いて、加賀藩の地図の歴史と地図作りを紹介し、越中の石黒信由に関連する能登の測量図（同館所蔵）も出品しました。

次に、企画展の中心となる伊能忠敬の生涯と測量についてパネル展示し、能登町における動きを詳細に解説。越中測量の際に忠敬に一時同行

した測量家石黒信由についても紹介しました。この展示で最も関心を集めたのは、石川県部分の伊能大図のフロア展示でした。大図を詳しく観察することができるとあって、多くの来館者の目を引きました。この他、羅針盤（富山県射水市新湊博物館所蔵）や海上測量図（複製）なども展示し、能登での測量の様子に思いをはせていただきました。

最後は、能登に関する風景図や村絵図、海岸図を展示し、能登の風景を多様な形で楽しんでいただきました。そのほか、「東京国立博物館所蔵伊能中図大日本沿海実測図」（複製武揚堂）八枚をすべて展示、本会会誌などの関連書籍も紹介しました。

筆者による学芸員解説、石川県支部の河崎倫代氏による講座も実施し、多くの参加者を得ました。また、新聞やテレビでも紹介され、この企画展示を契機として、さらに伊能忠敬の足跡を知つていただく機会になつたのではないかでしょうか。

最後になりましたが、伊能忠敬関係展示については、「能登さいはて資料館」（珠洲市狼煙町）の協力をいたしました。改めて、御礼申し上げます。



フロアに伊能大図複製、等身大の伊能忠敬像も



ロビーに伊能中図と御用旗を展示



伊能忠敬関連展示



学芸員解説の様子

映画「大河への道」



映画「大河への道」が5月20日に公開される。原作は、伊能忠敬研究会特別会員の立川志の輔氏。内容は志の輔氏の同題名の落語「大河への道」を映画化したもの。

伊能忠敬出身の千葉県香取市が地元振興を目的に大河ドラマ制作に向けてプロジェクトを立ち上げる。ところが、伊能忠敬は伊能図が完成する前に死亡していることに気がつく。

伊能忠敬の死後、弟子たちによつて伊能図が完成するまでの状況と大河ドラマ制作の苦悩をコメディ風に描く。映画に伊能忠敬は出てこない。

キャストは、中井貴一、松山ケンイチ、北川景子のほか立川志の輔氏も出演する。監督は中西健二、脚本は森下佳子。

伊能忠敬研究会は、伊能忠敬の測量方法の指導などで協力している。

映画の紹介サイト

<https://movies.shochiku.co.jp/taiga/>
<https://eiga.com/movie/96077/>

新入会員の自己紹介

京都府 阿部野 剛

初めまして。京都市在住の阿部野剛と申します。

小学生の時に伊能忠敬の存在を知り、地図帳を眺めたり、積層模型を作成したり、地域の地図を模写したりといったことを楽しんでいました。

大学では土木を勉強し卒業後は、土木技術者として、地元の自治体で働いています。

実は研究会には約20年前に入会しておりましたが、当時の私には難解で2年程で退会しておりました。今年、伊能忠敬が隠居した49歳になつたこと、7月に神戸市立博物館で開催された企画展を観て、改めて伊能忠敬の偉業に触れ、自分自身にフィードバックしたいと考え再入会させていただきました。企画展では、「作図の精緻さ」「技術的な価値」とともに「色彩の美しさ」を、当時の地名などを確認しながら、じっくり半日楽しんでおりました。

伊能忠敬研究会は、伊能忠敬の測量方法の指導などで協力している。

伊能忠敬研究会は、伊能忠敬の測量方法の指導などで協力している。



伊能忠敬展（神戸市立博物館）

山口県 石田 健治郎

人の特性、つまり海外の技術を取り入れる素養の高さ、勤勉さ、粘り強さとともに、その後の我が国の歴史への影響を考えると改めて伊能忠敬の偉大さを感じることとなりました。

また、「日本地図の作成」は「正確な暦を作るため、正確な地球の大きさ（子午線の距離）を測るため」の副

産物であったこと、その目的は第4次測量でほぼ達成されたのではないかと考えていて、その後の西日本測量においてどのようなモチベーションで進めていたのか疑問を持つています。諸説あるかもしれません、このような偉業は一人で出来ることではなく、部下を率いる実業家、マネージャーとしての素養の素晴らしさ、人間らしさにも触れてみたいと考えています。

どうぞよろしくお願い致します。

私は、父が亡くなり、墓誌の見直しをしたことがきっかけです。そんな中、曾根集落の生活道が赤間街道の道筋にあたることから、萩市明木宿から下関市吉田宿までの街道をつなぐ会が発足し、街道沿いの歴史を学びながら小学校の生徒達と歴史ウォーキングをしてきました。

私はガイドとしてかけだしです。第七次測量など伊能忠敬の功績、人間的魅力等を学んでいきたいと思いまますので、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

計報
神奈川県茅ヶ崎市の会員大八木行照さんが令和3年11月に逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

伊能忠敬研究会会則

第1章 総 則

第1条 本会は「伊能忠敬研究会」(THE INOH TADATAKA SOCIETY)と称する。

第2条 本会の事務局は理事会の定めるところにおく。

第3条 本会は内外の伊能図と伊能忠敬事跡の調査研究を行い、伊能忠敬の実像を普及して社会に貢献することを目的とする。

第4条 本会はその目的を達成するため、つぎの事業をおこなう。

1. 研究発表会、講演会、見学旅行などの開催
2. 会報「伊能忠敬研究」の発行
3. その他本会の目的達成に必要な事業

第2章 組 織

第5条 本会は次にあげる会員で組織される。

1. 伊能忠敬と伊能図に関連する分野の調査研究者・愛好家および伊能忠敬に関心のある個人または法人で、本会の活動を支えるため、会費あるいは賛助金を納入する一般会員、学生会員、特別会員。
2. その他理事会で承認する名譽会員。

第6条 本会に入会を希望する者は入会の申し込み後、第10条に定める会費を事務局に納入する。ただし、名譽会員は会費を免除す

ることができる。

第7条 本会の会員は次の特典を有する。

1. 本会の発行する会報等の配布を受け、本会の主催する講演会、研究会などの行事に参加できる。
2. 本会の発行する会報等に寄稿し、講演会、研究会で研究等の発表をすることができる。

第8条 本会の役員はつぎのとおりとする。

1. 理事12名以内、監事1名を置く。
2. 理事・監事は総会で選出され、任期2年とする。重任を妨げない。
3. 理事のうち1名を代表理事とし、理事会の業務を統括する。数名を常任理事として日常業務を分担する。代表理事に支障があつて職務を遂行できないときは理事会の承認により副代表または常任理事の1名が代表理事となる。ただし、任期は前任者の残存期間とする。

第9条 理事全員で理事会を構成してつぎの会務を行い本会を運営する。業務の一部を常任理事会に委任することができる。特別顧問、顧問及び監事は理事会に出席して意見を述べることができる。

第10条 総会は各年度における理事会の業務ならびに会計の監査を行い、総会で報告する。

第11条 本会に名譽代表、副代表、特別顧問、顧問、幹事を若干名置くことができる。

第12条 監事は、各年度における理事会の業務ならびに会計の監査を行ふ。2回催告して納入されない場合は特別な場合を除き除籍する。

第13条 本会に名譽代表、副代表、特別顧問、顧問、幹事を若干名置くことができる。

第14条 総会は全会員で組織し、本会の最高の議決機関とする。総会は代表理事が招集する。議長は総会で選出する。

第15条 定期総会は毎年招集し、つぎの事項を議決する。

1. 会則の変更
2. 予算・決算
3. 年度行事計画と報告
4. 役員の選出

第16条 総会の議決は、出席会員の過半数を以て行う。可否同数の場合は議長の裁定による。

の決定は、理事会の承認を要する。

第11条 本会は会の業務運営のため、理事会の下に事務局を置き、事務局の構成員を常任理事とする。理事は分担して次のような業務を処理する。

1. 会員担当：会報の発送、会員への諸連絡

2. 総務担当：会員の入退会、会費の請求、経費の支出記帳、総会、理事会の議事録作成、会員名簿の作成

3. 編集担当：会報の編集発行、その他関連資料の編集発行

4. 行事担当：総会、例会、講演会、懇親会など行事の催行

理事会は必要によりこれ以外の委員会等を置くことができる。

第17条 本会の経費は、会員の会費、賛助金、その他を以て充てる。既納の会費は途中退会しても返却しない。

途中入会の場合は、当該年度の会報を一括送付して、当年度会費に充当する。

1. 一般会員 会費 5千円(年額)

2. 学生会員 会費 3千円(年額)

3. 特別会員 賛助金 2万円(一口)

会費を滞納した会員には納入を告ぐ。2回催告して納入されない場合は特別な場合を除き除籍する。

第18条 本会の会計年度は4月1日より翌年3月31日までとする。

第19条 本会の会報編集基準、投稿規定期は別に定める。

第20条 本会の会則変更は、理事会の提案により総会で議決するものとする。

第21条 本会の会報は「伊能図研究」を継承し第7号から発行している。

第22条 本会則は、平成10年(1998)9月12日から施行する。

1999.5.8 一部改訂

2004.12.12 一部改訂

2014.6.21 一部改訂

2019.6.2 一部改訂

『伊能忠敬研究』投稿要領

伊能忠敬研究会入会の御案内

①原稿の長さ
論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していだだくこともあります。

②原稿のかたち
・本文（テキスト）原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmや350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込み、ページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org

・郵送の場合 <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取つておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとつてください。

次号（第97号）は2022年6月発行、**原稿締切は4月30日**です。

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバーコードナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール mail@inoh-ken.org

郵便振替口座 001-501-071-8610
ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

編集後記 ◇昨年は伊能図が完成し、幕府に上呈されてから100年目の節目に当たり、伊能忠敬が測量の基点とした、東京都江東区において式典や地図や測量機材の展示、測量体験、講演会、記念落語会といった行事が催された。◇雑誌やテレビ番組などでも伊能図完成200年が取り上げられた。◇本誌でも前号の95号で特集を組んだが、これ以外にも会員諸氏が主体的に関わった書籍が昨年末に複数上梓され、本号の書籍紹介と石川県支部だよりで紹介されている。◇一年間続いたコロナウイルス感染拡大で、年に一度の総会も資料の郵送による審議となつた。◇そんな状況下ではあるが、昨年の総会では役員改選が行われた。◇新たに理事に加わつてくださったのが、井上理事と堀野理事である。井上理事は九州支部の支部長であるが、今号から本誌の編集にも参加していただいている。◇コロナウイルスによる影響は、マイナス面が大きいことは言うまでもないが、一方で、インターネットの利用拡大ではプラス面が大きい。◇本号の編集に九州からご協力いただけたことは、今後の会の運営方法に新たな道を拓くことになると期待している。（H）